

片隅で世界の
改変された

夜空さくら

Tiasti

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

改変された世界の片隅で　　ゝ寮生・水下司晃編ゝ　目次

目が覚めたら完全拘束されていました	 2
親友はこの世界に順応しているようです	 8
普通に用を足すこともできません	 14
異常な世界にも良いところがありました	 20
改変された授業は過酷なものでした	 31
改変された世界の片隅で、浮かんで消えた	 55
特典・表紙イラスト差分	

あとがき・奥付

目が覚めたら完全拘束されていました

この世界は何者かに改変されている。

厨二病みたいなのを言っているとは思っただけど、そうとは思えない事実があった。

私がその事実に気づいたのは、何気ないある日の朝、学校の寮で目覚めた瞬間だった。

元々寝起きが良い方ではない私だけど、その日は寝苦しくて起床時間より早くに目が覚めた。

(暑い……喉、乾いた……)

寮の空調は自由には使えないけど、少なくとも不快にならないように管理されている。

それでも急な寒波や熱帯夜には対応仕切れないこともあって、その日もそれだと思っていた。

けれど、水を飲もうと起き上がろうとした身体が全く動かなかったので、いつもと違うような気はしていた。

(金縛り……？ いや、なにこれ？ すごい圧迫感が……)

寝相がいい方ではない私は、普通に仰向けに寝たとしても、朝起きたらベッドの端に寄っていたり、身体を丸めていたり、俯せになっていたりとすることは日常茶飯事だった。

けれど、いまはお手本のようなまっすぐな形になっていた。

るのが身体感覚でわかる。

(手も足も……指先も動かない……？ なにこれ……)

私は眠たい気持ちを抑えつつ、瞼を開いた。真っ暗だ。朝の早い時間だから、というわけじゃない。何かが目や鼻に覆い被さっていて、それが視界を遮っている。

ここに来て、私はいよいよおかしいことになっていることに気づいた。

目が見えないのもそうだけど、何も音が聞こえない。耳に何か詰まっているような感じがする。それを取ろうにも、腕は身体の横にびったり合わせた状態から動かなかった。

「むう、むぐ、ぐう！？」

声をあげようとして、口が塞がれているのに気づく。いや、正確には口を開こうとしても開けなかった。顎が固定されていて、口をしっかりと閉めた状態からわずかにも動かせなかった。

(ど、どうなってるの！？ 誰もいないの！？)

寮は個室であり、いるわけもなかったけど、周りの状況が一切わからない状態だったから自分が自室にいるのかもわからなかった。

それからしばらく、なんとか身体を動かせないかと色々やってみたけど、全て徒労に終わった。どうやら、全身がしっかりと拘束されているらしい。

(……寝ている間に浚われた……とか？ いえ、そんな馬

鹿な話……ないわよね)

私が住んでいるのは学校の寮だ。当然セキュリティはしっかりしているし、不審者が入り込む隙はないはず。

それこそ学校そのものが関与しない限り、寮から人を浚うなんて無理な話だろう。

そして、そもその話、私に浚われるような価値があるとは思えない。親が金持ちとか恨みを買うような職業であるとかでもないし、特別容姿が優れているわけでも、何かこれという特徴があるわけでもない。

何が起きているのか、私は暗闇の中で考え続けたけど、答えが出るはずもなかった。

そうしているうちに、トイレに行きたくなってくる。

昨日の夜、寝る前にお茶を飲んだからだ。起きたらトイレに行きたくなるのは自然なことだったけど、いまの私の状況でこれは辛い。

(もれちゃう……っ。誰か、どうかしてよお……!)

高まる尿意に私は身体を振らせて耐えるけど、それが長く続かないことは明白だった。

そのとき、急に耳の中でノイズが走った。電話が繋がった時みたいな感じだと思った私の耳に、声が聞こえる。

『皆さん、おはようございます。まもなく起床時間です』
その大人っぽく落ち着いた様子の、涼やかな声には聞き覚えがあった。

(いまの声……管理人さん!?)

この寮の管理人さんは若い女性の人で、寮に住んでいる子は皆「管理人さん」と呼び慕っている。悩み相談にも乗ってくれる『頼れるお姉さん』という感じの人だった。

少なくとも、誘拐や監禁みたいな怪しげなことに手を貸すような人じゃない。

なのに、いつもと変わらない落ち着いた様子だったことが不気味だった。

まるでそれが当たり前のことであるような――。

訳がわからず混乱していると、不意に真つ暗だった視界が開けた。見えてきた天井は、確かに寝る前にも見た、慣れた自分の部屋の天井だった。少なくともどこかに浚われたというわけではないらしい。

状況を把握しようとする視線を動かした私は、すぐ傍に管理人さんがいることに気づいた。

「ムウウツ!？」

どういふことか聞こうとした私は、やはり声が出せず、唸り声しかあげられない。けど、もし声が出せたとしても、結局驚きの声しか上げられなかっただろう。

そんな私の様子を、いつもと変わらない優しい目で見つめている管理人さんは。

ダイビングスーツみたいな、身体にぴっちり張り付く不思議な黒い服を着ていた。

首には金属のような素材で出来た、首輪、にしか見えな
い物を着けていて、そこから下は完全にそのスーツに覆わ
れていた。ぴっちりと身体に張り付き、管理人さんのボデ
イラインが強調されている。

元からスタイルがいいことを羨む子も多かった人だけ
ど、いまの服装だと必要以上にそれが強調されていて、は
つきり言ってみるのも恥ずかしい。

胸の形もはつきり浮き出ていて、先端の突起の形すらわ
かってしまいそう。手や足の指先までスーツに覆われてい
る。腰の辺りには金属で出来たパンツみたいなものをスー
ツの上から着ていて、そこだけ妙に嚴重そうだった。

そんな、言ってしまうえばエッチな格好をしているにも関
わらず、管理人さんは普通に笑い、私の視界の外で、私の
身体に触っているような感じがした。

『今日はちゃんと起きてたわね。えらいえらい』

目の前で喋っているはずの管理人さんの声が、耳栓を通
して聞こえてくる。わざわざ周囲の音を拾って耳の奥で流
しているのかもしれない。それはその機械が止められた
ら、聴覚が奪われるということだった。起きてすぐのあの
静寂はそういうことだろう。

目だけで管理人さんの動きを追っていると、急に全身の
締め付けが楽になり、身体が動かせるようになった。動か
せるようになったことで、私は自分がおかしな格好をして
いるのに気づく。

(な、なにこれ……！？)

手を目の前に持ってくれば、手は真つ黒いもので覆われ
ていた。管理人さんが身に付けているのと似ている。

それは全身を被っていて、管理人さんの格好とそう変わ
らない格好をしている。

ただ、私の場合は頭までその素材が覆っているようだっ
た。目出し帽みたいな感じで、目の部分以外は完全に覆わ
れている。鼻の部分には穴があるみたいで、呼吸は出来た
けど。

口が開けないのは、それが頭を覆っているからだった。

さらに、首には管理人さんと同じと思われる分厚い金属
製の首輪が巻き付けられていて、外せそうにない。太い首
輪のせいで首を自由に曲げたりすることが出来ず、少し俯
くのも苦しいくらいだった。

身体はというと、やはり黒い素材で出来たぴっちりとし
た服が覆っているのは管理人さんと変わらない。ただ、管
理人さんと違うのは、胸のところに、これもまた金属でき
ているらしいブラジャーみたいなのが着けられていると
いうことだった。なんとなく息苦しいと感じていたのはこ
れが原因だったみたいだ。金属のブラジャーは私の胸を完
全に覆っていて、一部の隙も無い。指を入り込ませる隙間
すらなく、乳房の柔らかさを感じられないように、しっか
りと固められていた。

そして、下半身。もう予想がついていたことだったけ

ど、私の下半身もまた管理人さんと同じように金属製のパンツのようなもので覆われていた。何かで見た『貞操帯』の方が正しい表現なのかもしれない。

一見、ただの金属で出来たパンツのようだけど、よく見ると細かい機構がいくつもあるようで、ただ下半身を封印しているというだけではなさそうだ。

最後に、足先。私はベッドに寝かされていたのだけど、掛け布団は無かった。スプリングの強いベッドの白いシーツの上にそのまま寝かされていたようだ。

そしてその足先は踵の高いブーツに覆われていた。それも半端な高さじゃない。ピンヒールもかくや、といわんばかりの高さの踵。とても立ち上がることなんてできないだろうと見てわかる。

そんなブーツは編み込み式で、しかもその編み込みをどう解いたらいいのかわからない状態にされていた。なにやら南京錠みたいなのがあって、それを外さないと恐らく脱げなくなっているのだろう。

身体のほとんどが覆われ、よくわからない器具に彩られた姿に、私はされていた。

『ほらほら、早く起きて準備しなきゃ』

呆然と自分の姿を確認していた私に、管理人さんが話しかけてくる。私は管理人さんにどうということが尋ねようとしたけど。

「ウウ、ウウオウーッ！」

口が開けないので、明瞭な言葉にならなかった。必死なこっちに対し、管理人さんは場違いなほどにこやかな笑顔だ。

『ほら、早く立って！』

（そんなことを言われても、こんな靴じゃ無……！？）

そう言おうとした私の身体は、ベッドに腰掛ける体勢になったかと思うと、実にスムーズに立ち上がった。まるでそれが当たり前のように、バランスを取るという意識もなく、自然と立てていた。

手でバランスを取るまでもない。体幹がぶれるということがなく、まるで体操選手のそれのようだった。

もちろん私は体操の経験など無いし、むしろ運動不足を悩んでいたくらいだ。

『はい、腕を後ろに回してね』

自分の身体が自分の身体じゃないみたいだ、なんて思っていたら、管理人さんがそう言って何か袋のようなものを手に私の後ろに移動する。

そんな指示に従う必要などないのに、私は自然と腕を後ろに回して、しかも揃えてグーを造っていた。

それはまるで、毎日同じ事をやっているかのような、自然さだった。

後ろに回した手に、何かが被さってくる。唯でさえ腕は不思議なスーツに覆われているのに、分厚い何かが腕を覆っていく。

私が何かを考えるよりも前に、手首の辺りが締め付けられる感触がして、手首から先が離せなくなった。

さらに今度は肘の辺りが締め付けられ、腕が動かせなくなる。身体が硬い方のはずなのに、肘と肘がほとんど接するほどに引き寄せられていた。

(いたっ……くない……)

それが逆に怖かった。もしかすると私はまだ寝ていて、変な夢を見ているのではないかという気さえしてくる。

けれども、身体から感じられる全ての感覚が、起きていることを伝えてきていた。

『はい、アームバインダーセット完了……うん。可愛い可愛い』

管理人さんはおしゃれで身に付けたヘアピンやリボンを褒めてくれるように、優しく私の頭を撫でながら褒めてくれた。けど、それを喜ぶことなんてもちろんできない。

『それじゃあ、早く食堂に行つてご飯食べてきてね。ダイエットでご飯抜くなんて許されないからね？』

茶目つ気たっぷりに言つた管理人さんは、そういうと、あとは振り返りもせず部屋から出て行つてしまった。部屋の扉は開けっ放しだった。

混乱したままの私が、部屋に残される。

(ええ……どうなつての？ これ……)

自分の身体の状態。管理人さんの態度。

わからないことだらけだ。部屋の内装や置いてあるもの

は昨日までと何ら変わりのない状態だから、余計にわけがわからない。

ただただ異常な世界に放り出された感覚。

私の知る限り、現代の日本の社会でこんなことが起こりうる訳がない。

(異世界……平行世界？ いえ、でもそうだとってもこんな世界あり得るの……？)

とにかく、腕の拘束だけでも外せないだろうか。

私はそう思つて両腕を揺すつてみたけど、管理人さんの言うアームバインダーというらしいものはびくともしなかった。分厚い革で出来ているみたいで、とてもじゃないけど力で千切れるとは思えない。

かといってハサミなどの刃物を使おうにも、グーの形にした手は動かない。

(自力での脱出は無理そう……いまはとにかく、食堂に向かつてみようかな……)

もしかすると外してもらえる機会があるかもしれない。

そう思い、行動を始める。

まずは管理人さんに言われた通り、食堂に向かおうと部屋を出て。

そこで、私と同じように拘束された人に鉢合わせた。

「ウウウー！」

向こうが声をあげてくれなかったら、危うくぶつかるところだった。

私は慌てて距離を取りつつ——咄嗟の動きだったのに、転ぶことはなく、やっぱり身体は自然と動いた——私はその誰かに頭を下げる。

声を上げられないから、それくらいしかなかった。恥ずかしい拘束姿を見られた、という羞恥心はそれほど大きくならなかった。

なぜなら、それよりも驚きの方が優先されたからだ。

私がぶつかりかけた、その子。もちろん全身が覆われていて、目元以外何も特徴はわからなかったのだけど、それでもその子を見間違えることはない。

（美夜……！）

寮の隣部屋の住民であり、入学以来何かと仲良くしている大親友だったのだから。

私同様、異様な姿にされている美夜は、いつもと変わらない笑顔を浮かべているのがわかる目元をしていて。

この異様な世界に順応していた。

親友はこの世界に順応しているようです

美夜はとても人懐っこい子で、いつもは寝起きの悪い私を起こしに来てくれる。

子供っぽいところも多々あるけど、弁えるところは弁えられる空気を讀むのが上手い子だった。

そんな美夜が、ぴっちりスーツに全身を覆われ、腕を後ろで固定され、首や胸やあそこを金属で覆われたエッチな格好で、私の前に立っている。

美夜は私に会えて嬉しいのか、目元だけでニコニコ笑いながら私に近付いてきた。

「ウー♪」

おはよう、とでも言っているつもりなのだろう。その様子からはこの状況に対する困惑や恐怖は見取れない。

いくら美夜が天然気味と言っても、私同様に突然この状態にされたのであれば、そんなに落ち着いてはいられないはずだ。

（やっぱり、この変化に気づいているのは私だけ……？でもどうし……ひゃあ！？）

巡らせようとした考えは、美夜が急激に接近してきたことで打ち消される。

美夜は私の目の前まで来ると、背丈が私より少しだけ低いから背伸びをして、私の口に自分の口を合わせて来たのだ。

もちろん、私も美夜も頭まで妙な服に覆われているから、その服越しではあったけど。

間に変なものが挟まっているとはいえ、口と口を合わせキスなんていうのは、外国でも恋人同士くらいでしかない。そして私と美夜は仲が良い親友ではあったけど、そういうことをする恋人ではなかった。

（ちよ、美夜……く、あつ！？）

嫌悪感とかそういうものを感じる前に、それどころじゃなくなった。

口と口を合わせて数秒後、身体の中で何かが動く感じがしたからだ。

痛みとかはなかったけど、私にとってその場所の奥から生じた感覚は、未知の物だった。

いままでもそこにそれはあったはずだけど、あまりに自然に存在していて、気づけなかった。でも一度ある、と気づいてしまうと急にそれを意識してしまうようになる。

（う、うそ……でしょ……？）

男性と交際したことはなく、当然ながらセックスの経験もない私は、処女だったはず。

その場所に——秘所に異物が入り込んでいるという状態はおかしいはずだった。

けれど、現実としてそこに何かがある。

突然判明した事実には呆然としている間、同じように身体の中をかき回されたはずの、私と同じように処女のはずの

美夜は、とろんと気持ちよさそうに目を細めていた。

気持ちよくなつてなれないはずだ。

私を感じているように、異様な感覚に戸惑うのが普通。それなのに、美夜は気持ちよくなっているらしい。

（実は美夜は経験豊富だった……とか、そんなわけないわよね……）

確認したわけじゃないし、もしかすると美夜は元々処女じゃなかったのかもしれない。

けれどいつもの美夜の様子を見る限りでは、その可能性を考えるよりは、何か不思議な力によってこの状態が普通に改変されたと考える方がまだあり得そうだ。

身体の中で動いた器具はすぐに止まった。どうやら、キスをすることで器具が動く仕組みになっているらしい。

止まったことに安堵する私とは対照的に、残念そうにしつつ、美夜は私に背を向け、軽快な足取りで歩きだした。

少し行ったところで振り返り、同じ場所から動いていない私を見てか首を傾げる。

「ウウ？」

どうやら待ってくれているようだ。慌ててその背を追いかける。

美夜は本来の彼女なら一度も履いたことのないだろう踵の高い靴でも、危なげなく軽快に歩いていた。それは私も同じことだけど。

（やつぱり、何もかもがおかしい……）

大がかりなドッキリとか、とんでもない規模の犯罪とか、そういうことを考えなくてもなかった。

けど、私の身体の慣れ具合まで変わっているとなると、これはもう人智を越えた何かが働いているとは思えない。

とにかくまずは状況を見極めるために、私は美夜のあとについて行った。

美夜がたどり着いた先は、予想通り食堂だった。

それはいいし、半ば予想していた状況ではあったのだけど、美夜についてきた私は、異様な光景に気が遠くなってしまう。

食堂には、私や美夜と同じ姿をした子達がぞろぞろいたのだから。

ここにたどり着くまでの過程で、何人もの同じ姿をした子たちとは出会った。けれど、食堂という大きな空間に、何十人も集まっている光景は、もはや異様というにも飛び抜けている。

ちなみに美夜とやったような「挨拶」は、特別仲良い子だけとするものらしく、すれ違うだけの子に対しては軽く頭を下げ合っただけだった。あの「挨拶」を皆とやっていたら消耗してしまうだろうし、助かった。

食堂の大まかな内装はほとんど変わっていなかったけ

ど、変わっているところもあった。

その内のひとつが、いつも注文をするためにカウンターの前に皆が列を作るのだけど、いまはそのカウンターは封鎖されている。

それに、並べられている机はそのままだったけど、その椅子が変わっていた。

昨日までの食堂の椅子は、どこにでも良くある、軽くて動かしやすい丸型のパイプ椅子だった。

いまの椅子は床に固定されていて、妙にメカメカしい。なんというか、機械で出来た切り株みたいだ。

(どこで注文するんだろう……？　というか、どうやって食べればいいの？)

私たちより前に来ている子たちの様子を見ても、拘束を解いてもらっているような様子はなかった。なにやら座る席に一台ずつ設置されているタブレットのようなものを一生懸命覗き込んでいるようだけど。

見渡していると、不意に腰を突かれる。美夜が不自由な腕で私を軽く突いたのだとわかった。

美夜が空いている席を見つけてくれたみたいだ。ふたつ並びで空いた席に座る。

それと同時にお尻から、かちり、という音がした。

(ん……？　なにいまの音……って、あれ？)

お尻が動かない。どういう仕組みかよくわからないけど、どうやらお尻の機械と椅子が連動して外れなくなっ

しまったようだ。

立ち上がれなくなってしまった。焦りつつ美夜の方を見てもみると、美夜は何事もないかのように目の前にあるタブレットをじつと見ている。

何が表示されているのだろう、と私も自分の前のタブレットを見てみた。

そこには美味しそうな料理が映し出されていた。それが何秒かごとに切り替わっていく。定番の朝の朝食から、ちよつとどっしり重そうな丼物も表示されていた。それは昨日まで私たちが食堂で食べていたメニューの写真だ。

(まさかこれが食事ってわけじゃないでしょうね……？) 絵に描いた餅を食べると言われているのかと一瞬思ってしまった。

けれど、不意に美夜が身体を曲げ、タブレットに鼻で触れたのを見て、そうではないことに気づく。小さな電子音がして美夜の前のタブレットの写真の切り替わりが止まる。みれば、美夜が朝にいつも食べている和風定食が表示されている。

美夜は満足したように身体を起こし、じつと動かなくなる。ふと、私が見ているのに気づくと、目で笑いかけてきつつも不思議そうに首を傾げた。

(……とりあえず、選べばいいのかな)

考えていても仕方ない。

私は自分の前のタブレットに向き直り、美味しそうな料

理の写真が流れていくのを見つめる。

（たぶん、注文したら持ってきてくれるのよね……そしたら拘束も外してもらえるかも！）

先に来ていた人たちがそうではないというのに、私は希望的観測でそう思っていた。

適当な写真を鼻先でタッチする。

（あ、ちよつと朝から重いかな……）

切り替わるタイミングを見極めるのを失敗して、ちよつと量が多めの物を選んでしまった。まあ、無理そうなら残せばいいし。

美夜が少し驚きを持って私を見ているのに気づいて、「間違えちゃった」という意図を込めて苦笑を浮かべて見る。目元だけで伝わるのかは微妙だったけど。

不意に、突き上げられるような衝撃が走った。

「ムグウ!？」

思わず呻き、跳び上がりかけたけど、お尻は椅子に張り付いてしまったように動かない。何が起きたかもわからない中、お腹の中が熱い感覚に満たされていく。

（まさ、か……お尻にも、何か刺さってるの？）

それを通して、身体の中に液体が注がれているのだというのを嫌でも理解する。

（もしかして、選んだ料理をお尻に入れられて……？）

そんな！

そうだとしたら、とんでもないことだ。流動食みたいにドロドロにしているのかもしれないけど、とても身体にいいとは思えない。

実際、料理そのものを液体状にしているわけではなく、栄養素を再現したものを入れていただけなのだけど、そんなことは私にはわからない。

なんとか外せないかとお尻を揺すって見るけど、全くびくともしなかった。

そうこうしているうちに、違う問題が生じ始める。

（うぐう……おなか……さけちやう……!）

注ぎ込まれる液体の量はかなり多かった。自分のお腹が徐々に膨らんでいくのが見える。

貞操帯が抑えてくれるかと思っただけど、お腹が膨らむのに連れて徐々に形を変えているらしく、膨らむのを抑えてはくれなかった。

「ウウウ……ッ!」

膨らんでいくお腹が苦しくて、背筋を反り返らせる。ただでさえ腕が固定されて胸を張る姿勢になっていたけど、それ以上に突き出すようにせざるを得ない。

死んじやう、と思っただ瞬間、注入が止まった。私のお腹はぱんぱんで、かなりの重量があるのか、少し身体を振るだけでずっしりとした重みを感じられる。

身体を振った拍子に、椅子に座っているお尻の位置がず

れ、固定が外れているのを知る。

（動けるようになったけど……く、くるしい……）

さらに、注がれた物が吸収され始めたのか、全身がカッと熱くなっていた。ご飯をたくさん食べたときのようだ。汗がにじみ出ているのがわかる。

いまは全身をラバースーツが覆っているため、汗でよりそれが張り付くような感じがして、気持ち悪かった。

しばらく椅子の上で悶えていると、すでに立ち上がった美夜が心配そうに私を見ていた。

私は心配させないようにと笑顔を浮かべようとしたけど、少し身体を動かそうとする度に苦しみが襲ってきて失敗する。

そんな私の様子を見て何を考えたのか、美夜が肩を使って私の肩を軽く押す。

身体の向きを変えるように言われているとなぜか悟った私は、椅子に座ったまま美夜の方に向き直る。背もたれがないから簡単だった。

（いったい、何を……み、美夜？）

向き直った私の膝の上に、美夜が乗ってくる。真正面から向かい合うような姿勢で、過度に膨れた私のお腹と、普通程度に膨らんだ美夜のお腹が擦れ合う。

まるで仲睦まじいカップルが人目もはばからず抱き合っているようだ。まあ、私も美夜も両手を後ろに拘束されているから、抱き合っているわけじゃないけど。

なんのつもりかわからない私に、美夜はその顔を近づけてきて、「挨拶」の時のように口と口とを重ね合わせようとしてきた。

反射的に逃げようとしたけど、座っている私に逃げる自由なんてない。ささやかな抵抗虚しく、口同士が重なる。

「ムウ、ウウウッ！」

すると当然、身体の中の物が震え出す。「挨拶」の時は数秒重ね合わせるだけだったけど、今回は中々離れてくれない。逃げようと試みる私を巧みに追って、重ね続ける美夜。美夜の中の物も動いているのが触れている太股から伝わってくる。

周りに沢山の人がいるのに、快感を与え合っている私たち。周りの人はそんな私たちを見ても何も反応しなかった。平然とそれぞれの行動を取っている。

（み、美夜……これ以上は……っ、ああっ！？）

身体の中で震えていたものが、急にその動きを変える。はつきりとその形がわかってしまうほど、ぐねぐねと蠢き始めたのだ。

目が眩むほどの快感が生じて、身体が跳ねそうになるけど、膝の上に美夜が乗っているから動けない。

「ウウ、クウッ、アッ」

足が跳ねる。それは膝の上に乗っている美夜のあそこを突き上げるのと同じことだった。

「ウウッ！ アウッ」

相当大的な刺激になってしまったのか、美夜が苦しげな声を上げる。

思わず彼女の心配してしまったけど、苦しげな声をあげた割に、美夜は気持ちよさそうだった。明らかに目が蕩けている。

なんで美夜はこんなことをするのかと思ったけど、快感に振り回されていると、お腹の苦しみを忘れることが出来ていた。そして、快感で誤魔化している間に、少しお腹の苦しみが落ち着いて来た気がする。

(よほど吸収がいいのかしら……でも、そんなのってあり得る……?)

不思議ではあったけど、とにかく苦しみが和らいだのは助かる。

そのことを私の目から悟ったのか、美夜の目元がにっこりと笑った。

「フウツ、ウウウツ！」

美夜の身体がびくと震え、彼女は絶頂を迎えたようだった。

私はいえ、気持ちよくはなれたけど、絶頂までは行っていないだったので、少しだけ不満が燐る。

美夜は私から離れると、困ったような目で壁に掛けられた時計を見る。

(ああ、そっか……授業があるのよね……この格好で?)

反射的に授業のことを思って、この状態で受けられるのかどうか気がになった。

美夜についていくべくなんとか立ち上がる。中途半端に高められた身体が疼いていたけど、これ以上ここで時間を浪費するわけにはいかない。

(あ……まずい……)

食堂から出たところで、私は衝撃のあまり忘れていたことを思い出した。

お腹に大量に注がれた物が吸収されたことも関係しているのかもしれないけど。

おトイレに、行きたかった。

普通に用を足すこともできません

おトイレに行きたい。

全身をラバーシューズで覆われた状態で、さらに金属製のパンツみたいなものも履かされている格好で、どうしてもいいのかわからないけど、もう尿意が限界だった。

幸か不幸か、美夜との絡みで生じた身体の疼きも、その尿意によつて少し紛れていた。

食堂から出たところで待つてくれた美夜に近付く際、トイレの方を目で見ると、美夜は大きく頷き、そして寮の入口へと歩いていった。

どうやら「トイレに行くから先に行つて」という意思是伝わったみたいだ。

(本当は、どうしたらいいのか、美夜に訊きたかったけど……仕方ないよね)

話せないというのは本当に厳しい。話せたとしても混乱するばかりで、ろくに話せなかった可能性はあるけど。

美夜はこの異常な状況を受け入れているようだったし、会話が噛み合わず変な顔をされていたことは確かだっただろう。

とにかく、美夜と別れて一人になった私はトイレに向かった。

食堂の位置もそうだったけど、大まかな部屋の場所は変わっていないみたいだ。

トイレの表示が見えて来て、私はつい早足になる。

(どうすればいいのかは……もう、見て判断するしかないわね……！)

トイレに扉はなく、そのまま入れるようになっていた。昨日までなら、入口でトイレ用のスリッパに履き替える必要があったけど、いまはそういったものは置かれていなかった。

(これは、まあそうよね……このブーツは自由に脱げないし……)

いまの私の足は、踵が極端に高い編み込み式のブーツによつて覆われている。

そしてそれは南京錠らしきもので固定されていて、手が使えたとしても脱げないようになっていた。

そうなるトイレの床を歩く靴で寝る時もしなければならぬということ、あまり衛生的に良いとは思えない。

外国だと割と靴のままでどこにでも行くというし、日本的な感覚ではあると思うけど。

しかし、結論からいえば衛生的な意味では心配する必要はなさそうだった。

(トイレ……なのよね？)

入口から見える範囲のトイレの床は、めちゃくちゃ綺麗だった。廊下の床と全く変わらない。そもそも汚れたことがあるのかどうか疑問なくらい、清潔そうな印象だった。

そういえば、前から清潔には保たれていたけど、いま改

めて見ると私の部屋も廊下も異常なくらい清潔だった気がする。

(皆が皆、全身ラバーシューズの格好なら、汗も髪の毛もほとんど落ちないだろうけど……トイレもそうなのかな)

綺麗すぎて滑らないか心配になりつつ、私はトイレの中に入る。

そして私は異常な光景を目の当たりにした。

まず、昨日までならんでいた個室の仕切りがない。洗面台もなければ手洗い場すらない。トイレは殺風景な、四角い空間になっていた。ただ、何もないわけじゃなくて、いままでも私たちが座って用を足していた便座があったくらいの間隔で、壁から不思議なものが飛び出していた。

それは、まるでクレーンゲームのクレーンが、横向きに突き出されているかのように見える。

三つに分かれたアームが、一本を真下に、残り二本を斜め上方向に広げる形で展開されている。

(なにこれ……?)

いままでも慣れ親しんでいた「トイレ」から、かけ離れた目の前の「トイレ」の光景に、私は途方に暮れて立ち尽くした。

何を、どうすれば用を足せるのかわからない。

壁から突き出しているクレーンのようなものくらいしかこの場所にはないので、間違いなくそのクレーンみたいなものがトイレに関わりがあるとは思っただけだ。

とりあえずもっと近付いてそのクレーンを確認してみることにする。

(やつぱり……これ、ただの棒が壁から飛び出してるわけじゃない……)

クレーンのアームを近くで見ると、なにやらハイテクな仕組みがあるらしい感じがした。詳しくはわからないけども、ただの棒でないことは確かだ。

そこで思い出されたのは、食堂でのことだった。股間に椅子が張り付いて、お尻に何かを注がれていた。

(……もし想像が正しければ、尿道にも何か管みたいなのが入っているはずよね)

普通は有り得ないことに思わず顔を顰める。

お尻もそうだったけど、そこに何の感覚もないことが逆に怖い。朝食をお尻に注がれるまで、そこに何かが挿し込まれているなんて思わなかった。

もっといえば、私の大事なところに何かが入れられていることにも、美夜と『朝の挨拶』をするまで気づけなかったのだ。

(なんで私がこんな目に……)

もう何度考えたかわからないことを心の中でぼやきつつ、用を足すためにクレーンの観察を続ける。

恐らく下の棒に跨がればいいのだろう。ちょうど突き出している高さが腰の高さくらいだし。

ただ、どっちを前にすればいいのかわからない。

そう思つて悩んでいると、三本のアームが繋がっているクレーンの本体が、奇妙な形に凹んでいることに気づくことができた。

縦に一本の溝が走っている。

(この幅……もしかして、腕が嵌まるようになってる?)

アームバインダーというらしい道具で拘束された私の両腕。クレーンに背中を預ければちょうど両腕がその溝に嵌まりそうな感じだった。

さつそく、背中を向け、棒を跨ぐようにしてクレーンに背中を預けてみる。

やっぱり凹んでいた溝はちょうど腕の太さに合っているみたいで、身体を左右に揺らすことも出来なくなった。

この方向で合っているみたいだ。

背中を預けると同時に、クレーンのアームに当たる部分が動く。

私の股間を下から持ち上げ、斜め上にある残り二本のアームは私の肩から胸を押さえるように。

三本のアームが私の身体を掴み、ただでさえ不自由な私の身体を拘束する。

「む、ふう……ッ!？」

股間は半ば覚悟していたけど、他のふたつのアームが予想外だった。

アームの先端が、私の胸を正面から押さえ込むように折れ曲がっている。いまの私の胸には金属製のブラが付けら

れているけど、それと固く結合してしまったかのように、身体を揺すろうとしても揺すれなくなった。

いま自由なのは足くらいだけど、真下のアームが私の身体を軽く持ち上げているので、爪先でトイレの床を擦ることくらいしかできない。

その場から移動できるほどには足が地に着かなかった。私が半ば空中に宙ぶらりんとなって無力感を噛み締めている間に、股間の異変が始まっていた。

(尿意が……消えてる……)

恐らく、いや、確実に股間に接しているアームが何かしているのだと思う。

さっきまですぐトイレに行きたかったのに、その感覚が消えて楽になっていた。

何かしらの管が尿道に通っているのはこれで間違いないみたいだ。

(……? なに、なんなの?)

股間にばかり集中していた私は、胸の異変に気づくのが遅れた。

なんだか、熱い。金属のブラに押さえつけられている胸が、妙に熱くなっている。

何かが入ってきているような。

(……まさか!?)

おぞましい想像をしてしまい、私は青ざめる。股間のアームを通して抜き取られている、出したばかり

の私の尿。

回収されたそれが、胸に入れられているのでは、と想像してしまったのだ。

(そ、そんなわけないわよね……違う、わよね)

いくらなんでもそれはないと思ったかった。そんなことをすれば、熱いでは済まないだろう。単に排尿をする度に胸に何かしらの薬を注入されるのだと思いたい。

いや、それはそれで嫌だけど、乳腺に尿を入れられるよりは遥かにマシだ。

胸が内側から弾けそう。金属のブラの中で、行き場を失った乳房がぱんぱんに膨らんでいるような、そんな圧力を感ずる。

(う、う……っ、これ、きつ、い……っ！)

尿が溜まっている時とはまた違う辛さがあつた。そっちが楽になったと思ったら、今度はこっちで苦しめられるなんて。完全に楽にしてくれない。

こうして私たちを虐めるのが目的なのだろうか。

(でも、美夜は……みんなは、苦しいって感じじゃないのよね……)

それが普通というか、楽しんでる気配すらある。

どうして私だけが普通感覚を持ってしまうているのだろうか。

私だけが改変されたことに気づいてしまったのか、それがわからない。

(それとも……私がおかしいの？ 本当はこれが当たり前だった？ じゃあ私の記憶にある普通って……なに？)

唸っている間に、トイレに別の子が入って来た。

思わず身体を固くしたけど、その子は私のことなんて何も気にすることなく、隣のアームによって空中に固定されていた。り、同じようにアームによって空中に固定されていた。

実に自然な様子だったけど、私が見ていることに気づくと、目元が不快そうに歪むのが見えた。どうやら、丸見えだけど故意に見るのはマナー違反のようだった。

確かに、トイレの個室に入るところをじろじろ見られていたら誰だって嫌だろう。

慌てて視線を前に戻す。

(……そういえば、いつ解放されるのかな)

私は足を限界まで伸ばして、靴裏で床を擦る。まだ降ろされてはいないようだ。

自動的ではなく、何か特別な合図があるのだとすると、私はそれを知らないから解放されないということになる。

一瞬焦ったけど、程なくしてアームの拘束が緩み、自然と足が地面についた。終えてみればトイレが綺麗なのは当たり前だった。汚れる余地が全くないのだから。

固定されていた股間も動かせるようになっていたので、腰をずらして股間を乗せていたアームの上から降りる。

その際気づいたのだけど、股間をピンポイントでアームに擦ったはずなのに、全然その感覚がしなかった。食堂で

座った時もほとんど何も感じなかったし、股間を覆う金属は相当分厚いのかもしれない。

（これって……手が自由になったとしても、自分で刺激を与えることは決してできないってことよね）

いまの状態でも、机の角や椅子の背もたれを使って刺激を与えることも出来ない。

それは燻つても何もできないということ、とても残酷な仕組みに感じた。

私は何かを追加されて疼く胸を感じながら、トイレの外へ向かう。

（こんなこと続けてたら、おかしくなっちゃう……）
どうにか脱出できないだろうか。

拘束を解いて、外に飛び出せば、あるいは。

そこまで考えて、この変化がこの学校内だけでは限らないことに思い至る。

もしかすると、世界中どこに行っても女性は拘束され、管理されている世界になっているかもしれないのに。

（とにかく、情報……せめて拘束が解かれて自由になる時間さえあれば……時間？）

遅刻対策なのか、廊下には色々な場所に時計が置かれている。その内のひとつを見ると、始業時間が近付いてきていた。

（遅刻……しない方がいいよね。教科書……は、どうせこの姿じゃ持って行けないし……）

美夜も食堂から寮の入口に直行していたみたいだし、急いで教室に向かうことにする。

うちの寮は学校の敷地内にあって、校舎までは歩いて数分かかる。

敷地内とはいえ、この格好で野外を歩くのは嫌だったけど、歩かないと校舎までいけないのだから仕方ない。

私は踵の高いブーツで転ばないように注意しつつ、急いで寮の入口へと向かった。

結論からいうと、野外は歩かずに済んだ。

寮の入口に行ってみると、いままで下駄箱が置いてあったスペースが丸ごと何かの作業場みたいに改装されていたからだ。

その作業場は壁一面に棚が用意されていて、大きな黒い箱のようなものが入っていたり入っていなかったりしているようだ。

そして、なぜか寮の管理人さんが出入り口のところに立っていた。

出入り口、とは言ったけど、その出入り口は私の記憶にあるものじゃなくなっていた。

昨日までの寮の入口はいかにも洒落た洋館という感じの、雰囲気ある重厚な扉が特徴的だった。けれど、今はその扉がない。

いや、扉がないというか、出入り口自体がその場所に見当たらなかった。

（ええ……？　どうなってるの？　ここが玄関じゃなくなってるの？）

そう思っ立ち尽くしている私を、管理人さんが手招きする。

『何してるの？　早く、こっちこっち！』

言われるまま、管理人さんに近付いた。管理人さんは相変わらずの格好で、身体のラインがくっきり出る全身スーツを纏って平然としていた。

管理人さん以外にも、大人の女性が何人かこの場にはいるのだけど、その人たちも皆一様に管理人さんや私たちが来ているようなラバースーツを身につけている。

基本的な装備は管理人さんと同じで、重そうな首輪に金属製のパンツを身につけていた。

その内のひとりが、管理人さんの傍に立った私の傍に、壁から持ってきたと思われる黒い箱を置く。側面にキャスターが付いているので、その気になれば転がして運ぶことも出来そうだった。いまは動かないように側面になっているけど。

箱、というよりはスーツケースの方が形状的には近いのかもしれない。

外出用の靴でも入っているのかと思ったけど、それにしてもその箱は大きすぎた。

管理人さんがその黒い箱を手に取り、横倒しにして蓋を開く。

何が入っているのかと身構えたけど、私の緊張に対してその中には何も入っていないかった。がらんだような中身が晒される。荷物を抑えるためか、ベルトのようなものがいくつもあるのは見えた。

これを持ってきたてどうするのだろう、と私が思っていると、管理人さんは不思議そうに私を見る。

「どうしたの？」

そう言われても、どうすればいいのかわからない。

戸惑う私に向け、管理人さんは信じられないことを口にした。

「ほら、早く——中に入って？」

その大きなケースの空洞を、管理人さんは指し示すのだった。

異常な世界にも良いところがありました

開かれた箱が、まるで怪物が口を開いているように感じる。

用意された真つ黒な箱。管理人さんにその中に入るように促された。

（は、入れと……？ この中に……）

とてもじゃないけど、入れるとは思えない。箱は明らかに小さくて、限界まで身体を縮めて入れるかどうか。

ましてや、いまは後ろ手に拘束されていて、普通より小さく丸まらない。

私が逡巡している間に、さっきトイレですれ違った子が隣にやって来た。その子はとても慣れた様子で開かれた箱の中に足を入れ、まるで最初からそこに収まっていたかのような滑らかさで身体を倒しながら折り畳み、手伝いの人たちにベルトを締めてもらって身体を固定されたかと思うと、何事もなく蓋が閉められ、そしてキャスターを使って壁際に運ばれていった。

かつて出入り口があったところには、空港でよくみる荷物を運ぶベルトコンベアの入口のような穴があり、箱はそこに乗せられて消えていった。

あまりに早い。人が一人消えるのを、呆然と見送ることに出来なかった。

『ぼんやりしてないで！ 急がないと遅刻するわよ！』

啞然としていた私のお尻を、管理人さんが掌で無造作に叩く。

管理人さんに怒られることは昨日までもあったけど、そんな風にお尻を叩かれたことはもちろん無かったので、ものすごく驚いた。

管理人さんは厳しい目で黒い箱に入るよう私を促す。

その厳しさに動揺した私は、言われるがまま、箱の中に片脚を踏み入れてしまった。

（でも、どうやって入れ、ば……？）

ここで、また不思議なことが起きた。

私の身体は勝手知ったるとばかりに、箱の中に身体を折り畳んで収めていったのだ。さっきの女の子と一緒だ。

それをするのが自然、とでも言いたげな、滑らかな動きだった。

絶対入れないと思っていたのに、上手く身体を丸めて、頭を曲げ、器用に箱の中の空間に自分の身体を収めてしまった。

管理人さんがそんな私の身体を、さらにベルトで引き絞りと、固定すると同時に圧縮して箱の空間に収まるようになっていく。

ベルトが胸やお腹に食い込んで来る。ただでさえラバースーツで圧迫感があるのに、さらに押さえつけられて私の身体は相当押さえ込まれていた。

（ぐぐっ……苦しい……っ）

ただでさえ全頭マスクで苦しいのに、狭いところに詰め込まれ、全身を締め上げられて苦しくないわけがない。

自由を求めて身体をくねらせたけど、ギシギシとベルトが軋む音しか出なかった。

ただ、その苦しみはまだまだ序の口だったと、すぐに知ることになる。

『それじゃあ、勉強頑張ってね』

そう言っただけでも見送ってくれる時のような笑顔で、管理人さんが箱の蓋をゆっくりと閉めてしまう。蓋の裏側はクッションみたいな柔らかな素材になっているようで、私の身体にフィットしながらも、押し潰そうとしてくる。

(っ、潰れちゃう……っ)

空気が圧縮され、隙間から噴き出すような音が響いたと同時に、全身に強い圧迫感を覚え、そして視界は完全な暗闇に閉ざされた。

指先ひとつ動かせない状態で、自分の呼吸する音とベルトが軋む音だけが狭い箱の中に響く。

私を囲っている周囲の壁から、カチリカチリと鍵をかけるような音が響いてきた。

(……うう……どんなに暴れてもびくともしそうにない……この分じや、教室についてからもなにが待っていることやら……)

朝起きてここに来るまでですら、めっちゃくちゃなことばっかりだったのに。

果たして次は何が待っているのかと想像するだけで怖かった。

何より怖いのは、私の意識に反して、身体はこの状況に慣れきってしまったということだった。

極端に踵の高い靴を履かされていたのに平気で歩けたり、この箱に入るのだって平然とこなしたり。

そもその話をするのなら、身体の中に何かを入れられていることなんて、相当ショックなことのはずなのに、こうして平然と思考していられるのもおかしいことだ。

本当ならもっと精神的にも嫌悪感とか拒否感とかあつて然るべきだと思う。

なのに、私はこの状況に戸惑いこそすれ、すぐにどうにかなってしまったようなレベルでの忌避感までは感じていないのだから。

本当なら錯乱したっておかしくないはずだ。

(いまの私は正気、なにかしら……)

そんなことを考えると怖くなってくる。

私は自分が正常で、周りが異常な状況だと思っているけど、本当はまったくの逆で、普通のことを異常だと感じてしまっている異常者、とか。

(そんな、ことはないはず……こんなことが普通なんて……絶対、ない)

心を強く持たないといけない。そう思いはするものの、果たしてそう思うことにどれほどの意味があるのかわから

なかった。

横倒しに寝かされていた状態から、箱が起こされて体育座りのような姿勢にさせられるのが、身体感覚でわかった。そうなると同時に身体を締め上げられるベルトの食い込み方が変わり、せつかく慣れ始めていた苦しみが復活する。

(う、動いてる……っ)

キヤスターが転がって動いている音が身体の下から響いてくる。

それは決して大きな震動では無かったけど、箱とほぼ一体化した私にはとても大きな震動に感じた。

一瞬浮遊感があった後、機械的な振動に晒され始める。たぶんあのベルトコンベアに乗せられたんだろう。これで教室までいくことになるんだろうか。

(ある意味、歩かなくていいから楽かも……いやいや！何を考えてるの！)

楽なわけがない。いくら身体を動かさなくてもいいからといって、楽なんていう言葉で表せることじゃない。

実際、現在進行形で苦しみは続いているのだから。

箱にどれくらいの機密性があるのかはわからないけど、蓋を閉めるときにいかにも密閉性の高そうな、空気が圧縮される音がしていた。

そのことを考えると、かなり空気は限られている。さつきからいくら息を吸っても、苦しいのが楽にならない。酸

素が欠乏しているのかもしれない。

(こんなところで……こんな風に死ぬのはいや……！)

なるべく呼吸を落ち着けた方がいいのはわかっているのだけど、焦りでどうしても呼吸が早くなる。

箱から脱出しようと身体を振っても、拘束は全くびくともしない。私は死の恐怖を感じつつ、意識が真っ白になるのを止められなかった。

不意に、呼吸が楽になる。

あぶない。一瞬意識を失っていたみたいだ。

呼吸が楽になった理由もわからず、新鮮な空気を身体に取り入れる。

「フシュー！ フシュー！」

勢いをつけて息を吸ったので、変な音が響く。

そうしていたら、頭を突然軽く小突かれた。

『水下司さん？ 何をしているの。早く起きなさい』

この声は担任の斉條先生だ。規則に厳格な先生で、正直少し苦手だったりする。

重い臉を持ち上げると、その見慣れた先生の顔が目の前にあった。いや、見慣れてはいるけど、見慣れていない顔だった。

記憶にある斉條先生は、五十代の年嵩の先生だったはずだ。

けれど、目の前にいる、斉條先生と同じ声をした女の先生は、どう判断しても三十代くらいだった。

確かに斉條先生っぽい感じはする。斉條先生を若返らせたらこうなるんじゃないかという感じ。肌の張りや艶が昨日までの斉條先生とは全く違う。

そしてそれは身体に関してもそうだった。若さに満ち溢れたボディラインが、やっぱり管理人さんと同じようにラバースーツで強調されている。管理人さんと違うのは、先生が着ているのはラバースーツのみで、金属製の貞操帯も首輪も見当たらないということだろう。

股間まで完全にラバースーツで覆われているのが見える。ぴっちりとしたラバースーツによって、恥丘の膨らみすら見て取れるようになっていたので、見ていてかなり恥ずかしい。

自分も似たような姿であるのは承知の上だけど、それでもやっぱり恥ずかしいものは恥ずかしかった。

思わず見入ってしまったっていると、斉條先生はさらに不愉快げにその顔を歪める。

『水下司さん。起きる気がないのであれば、罰則を受けてもらいますよ』

罰則。

その言葉を聞いた途端、急に心臓がきゅう、と締め上げられたような感じがした。

慌てて身体を起こし、詰め込まれていた箱から出て立ち

上がる。幸い、まだ許容範囲だったのか、斉條先生は一つ満足げに頷くと、私が出た箱の蓋を閉め、それを教室の端のロッカーに仕舞いに行った。

そのロッカーは私が昨日まで使っていたロッカーの位置と同じだった。大きさは箱に合わせて変わっているけど。ロッカーは箱を入れるための場所になっているみたいだった。

それを見るとはなしに見ながら、私は激しく跳ね回る心臓を感じていた。

一体罰則とは何のことなのだろう。私の身体はその罰則が何をもたらすのか知っているらしく、激しく高鳴る心臓は全く収まってくれなかった。

(罰則……何をされるのかはわからないけど、受けないようにした方が良いわね)

そもそも何が罰則対象になるのかもわからないから、とにかく言われたとおりにする、というくらいしかできないけど。

心臓の鼓動が落ち着いて来たところで、改めて周囲の状況を確認してみる。

やっぱり箱に詰められたまま、教室まで運ばれてきたみたいだった。私の教室は三階にあって、エレベーターも一機しかなかったはずだけど、一体どうやってここまで運んだのだろう。もしかするとベルトコンベアが三階まで伸びているのかもしれない。そこまでする必要があるのかどう

かはわからないけど。

すでに教室には何人ものクラスメイトがいて、皆私と同じ格好をしていた。仲の良い友達と「挨拶」を交わしている人もいれば、席に座って授業の開始を待っている人もいた。

クラスには美夜ほど特別仲のいい人はいなかったから、私は大人しく自分の椅子に座って授業の開始を待つことにする。

（わかってはいたけど……全然違うのね）

教科書やノートを持って来られなかったからどうするかと思っていたけど、机と椅子が変わっていた。昨日までのようないかにも教室にある椅子や机ではなく、どちらもとてもハイテクなメカメカしいものになっている。

机の方はデジタル画面が斜めに埋め込まれていて、恐らくここに教科書などが映し出されるのだろう。椅子は床に備え付けられているものになっていて、たぶんだけど食堂のそれと同じように何かしら仕組みがあるのだということにハッキリわかった。

「ウウ……」

食堂で身体の中に液体を注がれた記憶が蘇る。

（正直、座りたくは無いけど……そういうわけにもいかないわね）

不自由な身体なので転ばないように注意しつつ、椅子に腰かける。

腰かけたただけならまだ発動しないのか、それとも単に授業が始まっていけないからか、まだ何も起きないみたいだった。少しほっとする。

いつもの授業が始まる前の教室なのに、とても静かだった。皆口が塞がれているから、世間話をすることもできないのだから、当然ではあったけど。

聞こえてくるのは「挨拶」をしあっている子たちの呻き声くらいだ。

ふと、教室の前の方で「挨拶」をしている子たちに目が向く。髪型も何もわからないから個人の判別はしにくいはずだったけど、なぜか私は彼女たちのことがわかった。

（山口さんと田中さん……「挨拶」する仲間なんだ）

ふたりは何かと張り合っては口喧嘩をすることでも有名だった。ライバル関係だと周囲は認識しているし、実際ふたりが顔を合わせればまず相手の挑発から入っていたくらいには大猿の仲である。

けれど、この世界では仲のいい相手としかしないはずの「挨拶」を、二人は長々とやっている。あれだけ長く密着していれば、食堂で美夜がやってくれたように、とつくに身体の中のものに蠢き始めているはずだ。それを感じているだろうに、ふたりはなおも離れようとしなない。

金属製のブラ同士をぶつけ合いながら、身体を擦り合わせている。壁にもたれかかった山口さんの脚に田中さんの脚が絡みつき、互いの股間を押しつけ合っているようにも

見えた。そんな風に擦りつけ合ってはいるけど、実際はほとんど感覚はないはずだった。

まるで愛撫しあう仕草を互いに楽しんでいるような、陶然とした笑みがふたりに共通して浮かんでいる。

（仲が悪いと思っていたけど……実は仲が良かったのかな）

言葉を剥奪された結果、逆に正直になれているのかも知れない。

そういえばふたりは言い争いはしょっちゅうしていたけど、なんだかんだ言って息はぴったりだったし、互いに互いのことはよく知っている雰囲気はあった。互いに意地っ張りだから言い争いになっていたけど。

このふたりに関しては元の世界よりも、いまの世界の方が幸せなのかもしれない。

（そうになると、私も関係性が変わってることがあり得るのかな……）

美夜とは仲の良いままだったけど、苦手だと思っていた相手と仲良くなっていたり、逆に仲が良いはずの相手と疎遠になっていたりするのかも。

知り合いを見つけても、慎重に見極める必要があるかもしれない。

そう考えていると、授業の始まりを告げるチャイムが鳴り響いた。

果たして授業は普通なのか、それとも授業もおかしなこ

とになっているのか。

斉條先生が教壇に立つのを見つめながら、緊張が高まっていくのを感じていた。

チャイムが鳴った段階で、全てのクラスメイトが席に着いていた。

いつもならチャイムが鳴っても気にせずおしゃべりをする子が数人はいたものだけど、この世界ではおしゃべり自体が出来ないから、席に着くしかないようだった。

それに加えて「罰則」なるものが影響しているのだろう。皆それを受けたくないと思っているらしく、チャイムが鳴って座らない人はひとりもいなかった。

あれだけ激しく「挨拶」をしていた山口さんと田中さんも、チャイムが鳴ると同時に「挨拶」を切り上げ、それぞれの席に戻っている。それでも余韻は残っているのか、わずかに見える目はどこか蕩けていた。

『はい、それでは朝のホームルームを始めます』
教壇に立った斉條先生がそう私たちに向けて呼びかける。

それと同時に、座っていた椅子が動いた。食堂でのそれと同じように、貞操帯と椅子が結合して、お尻が動かせなくなる。そして、容赦なく太いものが身体を貫く感触が走った。

「グウ……ッ！」

この機能は正直覚悟していたので、衝撃は少なかった。昨日までは何気なく過ごしていた教室の中で、自分の一番大事なところと、普通ならほとんど触れるようなところではない場所を貫かれたのだから、多少のショックはもちろんあったけど、取り乱すほどの衝撃にはならなかった。ふたつの貫く衝撃は激しかったけど、それ以上の動きはなかったの、一端落ち着くと動揺も消えていく。

次に、椅子は私の両足を拘束してきた。両足をびったり揃えたお行儀のいい状態で、まとめてしまうように金属の棒が椅子から飛び出して固定してしまった。私がどんなに力を入れてもその金属の棒はびくともしなくて、ただでさえ貞操帯で固定されているのに、どう頑張っても椅子から立ち上がることが出来なくなった。

アームバインダーの締め付けもあって、腕も胸を反らした状態から動かせないから、綺麗な姿勢のまま動けない。クラス全員が一部の乱れもない姿で固まっている様は、まるで皆が置物になってしまったかのようにだった。

端から見れば、私もその置物のひとつなのだろうけど。

『——以上が本日の連絡事項です。今日も一日、勉学に励むように』

私が身体を貫かれる感覚や脚を固定されることに気を取られている間に、斉條先生の話が終わっていた。いつもの大したことのない連絡事項ならいいのだけど。大事な連絡

を聞き逃していないことを祈る。

斉條先生は小脇に名簿を抱えて、教室を出て行ってしまふ。ラバースーツだけを身に纏った先生の歩みは堂々としたもので、思わず見惚れてしまうほどだった。

先生がいなくなった教室は、静かだった。いつもなら一時間目が始まるまでのわずかな時間でもみんなおしゃべりに花を咲かせるところだけど、いまは誰も喋れないから、異様な静寂だけが教室に流れている。

（今日の一時間目の授業ってなんだっけ？）

私は何気なく、教室の隅に掲示されている時間割を見る。本当ならこんなに落ち着いているような状況ではないと思うのだけど、どう足掻いても動けないのだから仕方ない。

異常なほどに落ちついていて自分と自分では違和感を感じているけど、どうしようもないのだから仕方ないと思えていた。

時間割の内容は私の記憶にある内容とほとんど変わらなかった。けれど、いくつか見た覚えのない授業が含まれていることに気付く。

（国語、数学、社会、理科……とかほとんど普通なのに、『拘束』ってなに……すでに拘束されてるじゃない）

体育の授業もあるけど、それがいくつか削られて「拘束」と書かれている。

その見た覚えも受けた覚えもない『拘束』の授業は予想

のしようもないからさておき、この格好でどうやって『体育』を行うのだろう。

もしかすると、そのときだけラバースーツが脱げるのかもしれない。もしそうだとしたら、そのときこそ脱出のチャンスだった。

(……でも、授業放棄って明らかに罰則の対象っぽいよね……いえ、それでもこのままこんな異常な世界に居続けるのは嫌だし……なんとか学校外に出られれば……)

何らかの理由で世界の――学校の常識が改変されたのはもう間違いない。

あとはそれが学校だけのことなのか、それとも全世界に及んでいるのが重要だった。

学校だけのことなら、なんとしても脱出したい。

もし、世界全体が変わってしまったら。

(……そのときは……いえ、それは考えないようにしよう……いまはとにかく学校から脱出することを考えて行動すればいい)

もしもそうになっていたとしたら、それはもうどうしようもない。

改変されたこの世界を受け入れつつある自分を感じつつも、私はせめて足掻くことは止めまい、と抗う気持ちを改めて強く抱いた。

一時間目の授業を担当する先生が、教室に入ってくる。

「おー、授業始めるぞー」

一時間目の授業の先生は、男の先生だった。

こんな状態になってから初めて、男の人を目にした。

思わずドキリとして身体が震えたけど、先生は私たちの姿に何らかの反応を見せることなく、教壇に立って教科書を広げる。

「今回は、34ページまでやったんだっとな」

先生は普通の格好をしていた。やる気のなさやだらしないさがシワのついたスーツに表れている。

いつも通りに、いつもと同じ退屈な授業を始める。

それが逆に奇妙だった。

この先生は胸の大きな子や可愛い子を最蔑するので皆に嫌われていた。

いまこの教室には普段の制服よりもずっと胸や身体のラインが強調されるラバースーツを着ている子しかいないというのに、先生はそれに反応を示そうとしない。

普段のこの先生がいまのような教室の光景を見たら、人目も憚らずにイヤらしい目を向けるはずなのに。

(世界の改変にこの先生は関係ない……のかな?)

いつもよりさらに無気力で無表情に、淡々と授業を行っていた。

退屈ながらも、自分の身体の状態が状態なので居眠りすることも出来ず、授業を受けることが出来ていた。手慰みにペンを回したり、こっそり携帯を弄ったりすることもできないから、いつもより授業に集中出来るくらいだ。

ただ、授業のやり方自体は変わっていないので、退屈は退屈だった。淡々と教科書を読む先生の声だけが教室に響く。

そのとき、ふと気付いたら私の斜め前の席の舞潟さんがゆっくり左右に揺れていた。どうやらあまりに退屈な授業すぎて、この格好でさえ船をこぎ始めたみたいだ。

（あー、舞潟さん、こうなる前からよく授業中に寝てたもんねえ……）

なまじ他の子が背筋をぴんと伸ばしたまま動かないから、そういう動きは余計に目立つ。ちやうどそのとき、先生が教室を見渡した。運が悪い。たぶん先生も舞潟さんが居眠りしかけていることに気付いただろう。

昨日までなら、形だけの注意が飛んだところだ。

けれど、なぜか先生は何も言わずにそのまま授業を続けていた。

居眠りは罰則の対象にならないんだろうか。

罰則がどういうものか、何を基準に与えられるか、私にはわからない。もし先生が反応したなら、その基準がひとつ明らかになったかもしれないのに。

舞潟さんには悪いけど、私は少しがっかりした。

その時だ。

いよいよ机に突っ伏してしまいそうになっていた舞潟さんが、突然身体を震わせて背筋をぴんと伸ばした。それは寝かけていた自分に気付いて、自分で起きたという感じで

は無く、明らかに何かが影響した結果のようだった。

ふるふると背中が震えている。

（……なるほど。居眠り対策には何かしらの仕掛けがあるってことね）

脳波をチェックしているのか、それとも見えてないところで先生がスイッチでも押したのかはわからないけど、居眠りすると強制的に起こされるわけだ。

人間の扱いとは思えないくらい身体が不自由なことを除けば、理想的な学習体勢かもしれない。目の前の授業に集中するしかないから、学習効率も高いだろうし。

改変された世界で真面目に勉強することが、どれほど意味があるのかはわからないけど。

自分でいうのもなんだけど、それなりに真面目な方である私にとっては、実はさほど悪い状況ではないのかもしれない。

そんな私の甘い考えは——『拘束』の授業によって脆くも崩れ去ることになる。

ああ、とても眠い。

あたしはいつも通り退屈な授業を聴きながらそう思っ

いた。

いくら全身をラバースーツで締め付けられ、無駄な動きや関係のない行動を一切出来ないようにされていると言っても、授業自体に魅力がなければ退屈極まりない。

睡眠時間から何から完全に管理されている『学校寮組』と違って、『実家組』のあたしはこの退屈な時間が特に苦手だった。

身体に取り付けられた各種器具のせいで寝づらいとはいっても、あまりに退屈な授業はそれを超えて眠気を誘ってくるからだ。昨日はちよつと夜更かししちゃったし。

自分で自分の身体が揺らめいているのがわかる。

こうなると、入学の時に『学校寮組』を選んでおけばよかったかなと後悔する。

この学校では、入学時に『学校寮組』か『実家組』かを選ぶことになっていた。あたしは入学から卒業までの三年間、全てを厳密に管理されるという完全拘束感が嫌で、家に帰ってからは自由にしてもいい『実家組』を選んだ。

個人の自由がほとんどない『学校寮組』を選ぶような子達は、よほどのマゾか、究極の真面目ちゃんだと思っていたものだ。

だけど、毎朝親にラバースーツを着せて拘束してもらうのも大変だし、街中を『制服』で歩くのも恥ずかしいので、いまでは『実家組』を選んだのを若干後悔している。

いつでも『学校寮組』への転換は可能なんだけど、一度

選ぶと卒業まで学校から出ることが出来なくなるので、二の足を踏んでしまっていた。

こうして退屈な授業で居眠りを仕掛ける度、やっぱり『学校寮組』になっておけばよかったと後悔するのだった。

眠気が限界で、体勢を維持するのも一苦労だ。

(寝ちゃ、だめ……あれが……ある……のに……)

授業中の居眠りに対する『罰則』はない。

『罰則』は生徒が自らの意思で起こしたことに對するものであるためだ。

例えば起床時間を過ぎても起きようとしないとか、授業をボイコットするとか。

授業中の居眠りは、この状態でなお眠くなるような授業をする教師が悪いということになるみたい。

でも、居眠りが放置されるわけではない。ちゃんと対応の対策が取られている。

それを避けるためには、起きていなければならないのだけど、居眠りは自分の意思ではどうにもならなかった。

いよいよ机に突っ伏してしまいそうになった時——それが始まる。

(——んぎッ!)

椅子に固定され、両方の穴が貫かれている股間に、新たな刺激が生まれた。思わず背筋を伸ばし、微睡みかけていた意識が一気に鮮明になった。

ふたつの穴を貫いているものは動いていない。

それらもう少し前、新しい刺激が生まれたのは尿道だった。

この格好をしている以上、その場所にも当然細工は施されている。具体的には弁付きのカテーテルがそこを貫いて、膀胱内でカテーテルの先端がボールのように膨らみ、自分の意思では排尿できないようにされている。

特殊な機械を通せば出すことが出来るけど、いまはそうしてはくれなかった。

むしろ、カテーテルを逆流して、特別な液体があたしの中に注ぎ込まれていた。

(あ、ああっ……！ い、いたいっ！)

どんどん押し込まれる液体があたしの膀胱を膨らませていく。それはトイレに行きたいという切迫感を超え、膀胱が限界を超えて膨らむ痛みになっていた。

外からはラバースーツに押さえ込まれているからほとんど変化がないけど、だからこそ余計に痛みが強くなる。

眠気なんてあつというまに飛んでいった。一刻も早く出したい、トイレに行きたいという切迫感が頭の中を埋め尽くす。

不自由な身体を震わせて、その感覚に耐えていると、不意にそれが楽になった。

スーツと波が引いていくように、破裂しそうだった膀胱の痛みが消えていく。

(はー……ああ、目が覚めた……)

時間にすれば三十秒程度のことだったと思う。

けれど、その一瞬で眠気は嘘のようになくなり、また授業に集中出来るようになっていた。居眠りさせない仕組みとしてはとても効率的だとは思うけど、退屈な受業自体に変わりはない。

やる気のない先生が教科書を読み上げるのを聞き流しながら、あたしは思う。

(あーあ……早く『拘束』の時間にならないかなあ……)
この学校ならではの授業である『拘束』科目。

今日の犠牲者は誰になるのか——あたしは『拘束』の時間が楽しみで仕方なかった。

改変された授業は過酷なものでした

授業が続く。

最初はこんな格好でともに授業を受けることなんて出来ないだろう、という気持ちだったけど、普通の授業は普通に進行していたし、下手に身体を動かさない分、集中出来てしまったくらいだった。

一時間目の授業は昨日までの授業と同じく、担当の先生が教科書を読むだけ、という退屈なものだったけど、二時間目三時間目の授業はこの世界に合わせてきちんとバージョンアップが計られていた。

飽きさせない工夫という物がちゃんとあって、話を聞いているだけなのに面白い。どうやら前から熱意のあった先生はちゃんと授業のやり方というのを考えてくれていたみたいだった。前の状態だと生徒の方が聞く気がなかったり考える気がなかったりしたりしたけど、いまは皆それしか出来ることがないので、打てば響く状態になっている。

熱意がある先生ほど、良い授業になるのは当たり前かもしれない。

板書や計算はどうなるのかなと思っていたけど、板書の要点は自動的にまとめたものが机の液晶画面に表示されてくれたし、書かなきゃ解けないような複雑な計算は宿題として与えられた。

授業中は解き方のコツとか公式の覚え方とかが主で、こ

の方が合理的だと感心してしまった。もともと、宿題をするときに手の拘束は解かれるのか、ちよつと気になったけど、それはそのときになればわかるはずだ。

そんな感じで、比較的穏やかに授業自体は進行していた。

整えられた授業でこの身体の状態でも居眠りをしてしまう人はするのか、たまにふらふらした後に激しく震えていた人はいたけど、それもすぐに気にならなくなった。

人間の慣れって本当に怖い。

私の認識では数時間授業を受けただけなのに、生徒が皆全身ラバースーツに包まれて、呻き声以外の声を一切あげない、そんな異常すぎる授業風景を受け入れているのだから。

（やっぱり、私はもうとつくの昔に狂ってしまったのかも……）

昨日までの常識が薄らいで、新たな常識が上塗りされていくのを感じる。このまま私はこの世界に順応して、やがて周りの皆と同じように何も感じなくなるのかもしれない。

そんなことをとりとめも無く考えつつ、休み時間となっている空白の時間をぼんやりして過ごしていた。

改変された世界の休み時間はとても静かだった。脚の拘束は外れていて、多少身体は動かせるのだけど、椅子と股間の機械の接続が外れていないから、立ち上がることが出

来ないからだ。皆脚を伸ばしたりぶらつかせたり、首を回したりする程度しかできない。

トイレに行きたくなったらどうすればいいのかわからないけど、いまのところ誰一人席を立ててトイレに行く気配がない。

それに、おしっこが溜まる感覚がないところを見ると、働かないように溜まる端から何らかの処理がされている可能性が高かった。

処理されているにせよ、何の感覚もないというのは恐ろしかったけど、認識すらできないせいで拒否感はそれほどない。

あるいはこの拒否感の乏しさ自体、私自身も改変された世界に馴染みつつある証拠なのかもしれない。

(たまたま完全に改変されそこなっただけで……本当は改変されるはずだったのかも)

元々世界はこうで、自分の頭がおかしくなったと思うより、世界の改変に取り残されたと思う方がまだ気は楽だ。

いずれこの世界を異常と感じている私の思いも消えてしまふのかもしれない。

この世界に抗う気持ちたちが徐々に消えつつあるのを、どこか冷静に感じていた。

そして——いよいよ、改変された時間割の中で、一際異彩を放つ『拘束』の時間がやって来た。

私には『拘束』の授業を受けた記憶がなく、担当の先生が誰かもわからない。

(知らない先生なのかな……男の先生だったらヤダなあ……ああ、でも女の先生もなあ)

そう悶々と思いながら先生が来るのを待つ。

ここまでの授業では、男の先生は昨日までと変わらなかったけど、女の先生は皆ラバースーツのみを着ていた。

朝の斉條先生もそうだったけど、首から下が露出なくぴっちり覆われていて、身体のラインが強調されていてかなり卑猥な格好だったと思う。

私以外の誰も気にしてなかったけども。

その状態で器用に教科書を捲ったり、板書したりしていたから、なんとも奇妙な光景だった。テカテカした胸やお尻が身動きする度に揺れるものだから、気が散って仕方なかった。

これまでの授業のことを思い出していると、教室の扉を開けて斉條先生が入ってきた。いつも通りの悠然とした足取りで、教壇の前に立つ。

どうやら『拘束』の授業の担当は斉條先生のような。朝と変わらないラバースーツ一枚の格好で、厳しい顔つきで教室を睥睨する。

『皆起きていますね？ 少し早いです、移動を開始します』

齊條先生が教壇の上で何かすると同時に、椅子に股間を固定していた接続が外された。

身体の中に満ちていた突起物が収納されていくのを感じる。そういえばずっと貫かれた状態なんだった。途中からそれを意識しなくなっていたことに気付いて、ドキリとする。

立ち上がれるようになった皆が、一斉に立ち上がって動き始める。私も慌てて立ち上がったけど、皆と違ってどう動いたらいのかわからないので、おろおろすることしか出来なかった。

教室の扉に対し、一列に並んでいるみたいだけど、何順なのか。

『水下司さん、早く並びなさい』

皆と違っていまだ机の傍にいた私に、齊條先生が厳しい目を向けてくる。

（どう並べばいいのかわからないんだから、仕方ないじゃない！）

反発心が沸き上がるけれど、そんなことを言えるわけもない。

というか、物理的に言えない。

私は並んでいる子達の並びを見て、背の順ではなく、出席番号順だと当たりを付ける。

慌てて列の後ろの方に向かいつつ、改めて自分の認識もおかしなことに気付いた。なぜなら、ラバースーツと全頭

マスクを身に付け、同じ格好をしている私たちはほとんど見分けが付かないはずだからだ。

そりや目元とか、大体の体つきはわかるけど、昨日までの私では誰が誰かなんてとてもわからなかっただろう。よっぽど仲の良い美夜くらいならわかったかもしれないけど。

こうしてずらりと並ばれてみると、その判別の困難具合がよくわかる。

体内への器具の挿入に対する忌避感の薄さなど、内面的にも影響を受けてしまっている。

それはとても、恐ろしいことだった。

並んでどうするのかと思っていたら、どうやら一列に並んだ私たち生徒には、首輪に鎖が取り付けられるみたいだった。その鎖は前にいる子の首輪に繋がられ、クラスメイト全員が数珠みたいに繋がられている。

まるで奴隷が移動するみたいだな、と頭の片隅でぼんやり思った。

鎖はさほど遊びがなく、少しでも遅れたり早く歩き過ぎたりすると前後を引っばってしまいそうだ。

『さあ、行きますよ』

先頭の子の鎖を握った齊條先生が扉を開けて廊下を歩き出す。その後について、そろそろとクラスが動き出した。チャリチャリ、と鎖の鳴る音がだけがうるさい。

私は遅れないよう、かといって足早にならないよう、速

度を調整して前の子に付いていった。

廊下は昨日までとほとんど変わらなかった。誰が掲示したのか、『廊下は走らない！』みたいなポスターも昨日のままである。休み時間は自由に動けず、教室移動する時でさえ、こうして鎖で繋がれているというのに、一体誰が走れるんだろう。先生かな。

通りかかった隣の教室の中を横目で見ると、やっぱりそこも私たちと同じ格好をした子たちが、席に座ったまま次の時間の始まりを待っていた。黒いラバーシューズと金属製のブラの怪しい輝きが、音もなくずらりと並んでいて、とても不気味な感じがした。

そんな風にいくつかの教室を通り過ぎ、昨日までは多目的室だった広めの部屋にたどり着く。入口に掲げられている昨日まで『多目的室』だったプレートは、『拘束室』に変わっていた。ここが次の授業の場所になるみたいだ。

皆に続いて拘束室に入り、中の様子を見た時、私は思わず身を竦めて立ち止まってしまった。前の子が進んで首輪の鎖が引っぱられ、つんのめる。

「アウツ！」

「ウグッ！」

首が絞まったのだろう。前の子が苦しそうに呻く。

振り返った彼女は涙目で私を睨みつけていた。

（ご、ごめん！）

慌てて前に出ようとして、今度は速すぎて後の鎖の余裕

がなくなってしまう。

「オウツ！」

「グ……！」

後の子は優秀だった。テンションがかかり切る前に、後に影響しない程度の絶妙な一步を踏み出し、可能な限り苦しみを減衰させてくれた。

おかげで、私の首はそんなに締まらなかった。

すぐに程よい距離に身体的位置を修正する。

「ウウ……！」

ありがとう、という気持ちを込めて後を振り返ると、苦笑気味に細められた目が「気にするな」と言っていた。

『そこ、騒いでないで早く中に入る！ 後が中に入れないでしょう！』

斉條先生の叱責が飛んで、慌てて前の子について拘束室の中へと入った。

拘束室の中は、おどろおどろしい雰囲気だった。

私にはそういった物に対する知識はなかったのだけど、明らかに『それ』を目的とした道具が所狭しと用意されていた。中にはどう使うのかわからない不思議な器具もあったけど、ただ『そのこと』だけはわかった。ここにある全ての道具は――

人を拘束するための道具、だということが。

それが理解できたのは、私でも知っているベルトが沢山ついた電気椅子と思われるものがあったというのもあるけど、最大の理由は天井にあった。

天井から吊り下げられている人の形をした籠。

それの中に現在進行形で——女の子が拘束されていたため、だ。

人型の籠はただの人型じゃなく、まるで車に挽き潰された蛙のような格好にされるようになっていた。とても無様で、屈辱的な体勢だ。

両手はパーの形に広げて、顔の横に並べるようにさせられている。両足は普通の女の子なら絶対にやらない180度のM字開脚で固定され、斜め下から見上げている私たちからだと前のスリットも後の肛門もぼっちり見えてしまっていた。

そう、そこが見えてしまっていた。つまり、彼女は私たちが着せられているラバースーツをその身につけていなかった。

その子は素っ裸で、その人型の籠に閉じ込められていたのだ。

籠に遊びの空間はなく、彼女は手の指先を曲げることすら許されていない。身体に食い込むほどにギリギリの造りのようで、彼女は身を振ることすら出来ないみたいだった。

相当苦しいのだと思う。彼女がかすかに呻く声が聞こえ

てきていた。

彼女は目隠しをされていて、視界も奪われていた。その上に籠の柵が通っていて、万が一にもずれないようにされている。

口は開きっぱなしだった。柵とはまた別の金属製の網が口内を押し広げていて、開いた口の中まで見えるようになっていた。その網が舌を押さえつけているから、呻き声しかあげられないのだろう。口で苦しそうに呼吸しているのがなんとなくわかる。

彼女の胸部も、金属製の籠の柵が食い込む程度に押さえつけていて、たぶんだけど深く呼吸することも出来ないはずだった。もし胸を膨らませようとすれば、その分だけ柵が身体に食い込むことになる。

乳房の部分はお椀状に膨らんでいる、と見えただけ、よく見ると乳首の先にピアスを通すような穴が開けられていて、そこに通された輪っかが柵に引っかけられて彼女の乳房全体を引っばっていた。常に乳首が引っばられているようなもので、相当痛いはずだ。

そして、大開帳させられている股間が、何もされていないわけもなく。

そこも口を開かせているのと同じ、人型の籠とは別の細い金属で出来た網が広げていた。かなり太いように思える。ぱっくりと開かされた二つの穴は、奥の奥まで見えるようにされている。

無残に拡張され、体内の粘液が乾いてしまうんじゃないかと心配になったけど、よくよくみると、挿し込まれている二つの網には、透明なカバーのような物がしてあるようだった。一応最低限度の健康には気を遣われているのかもしれない。

いずれにせよ、彼女は普通は誰にも見せることはないだろう場所まで露わにされ、晒し者にされていた。

私からすれば見ているだけでも恥ずかしくなってしまう晒され方なのだけど、他の皆からするとそうでもないらしく、むしろ興味深そうな目で拘束された彼女を見上げていた。

彼女に気を取られている間に、斉條先生が皆の首輪から鎖を外し、部屋の隅に並ぶように指示を出した。

今回は特に順序などはなく、とりあえず邪魔にならないようにということらしい。私も急いで壁際に立った。

先生が部屋の壁にあるスイッチを押すと、吊り下げられていた彼女がゆっくり下に降ろされてきた。

「ハア……ウウ……アウウ……ハア……ハア……」

かすかに呻く声と、浅く早い呼吸音が聞こえてくる。

当たり前だけど、苦しそうだった。先生はそんな彼女の様子に頓着せず、平然とした声音で授業の開始を告げる。

『それでは授業を始めます。彼女は昨日の夜半過ぎに歓楽街を出歩いていたところを補導され、このように厳しい罰則を受けることになりました』

あまりに扱いが酷すぎると思ったら、どうやら罰則の環境だったらしい。

こんな風にされるということを無意識にわかっていたら、『罰則』という言葉聞いてあれほどの悪寒が走るのも納得だった。

彼女はそれをいうためだけに降ろされたのか、斉條先生は再び彼女を吊り上げてしまう。そして何事もなかったように授業が進んだ。

『拘束にはこのような罰となるほど厳しい物もあります。基本的にはいま皆さんがされているように、自由を奪うことを目的として――』

先生が解説を続けていたけど、私は吊り上げられていた彼女の方が気になって仕方なかった。

天井付近に戻された彼女は、窮屈な人型に収められたまま、指先一つ動かせない地獄の中にいるはずだった。一度降ろされて解放してもらえるかもと期待してしまっただろうし、改めてつり下げられ、余計に絶望を感じているだろう。

彼女が不自由な身体を震わせ、籠がかすかに軋む音がした。けれどももちろん金属の籠はびくともせず、ただ軋む音が響いただけで何も起きなかった。

そんな風に、完全に自由を奪われて。

ただ呻き、籠を軋ませるだけの『物』にされている彼女。

それは、なんて。

『——水下司さん。三度目です』

はっ、と思った時にはもう遅かった。

斉條先生の鋭い目が、私を射貫いていた。周囲の子たちが私に注目している。

脚が、身体が、心が、恐怖に震えた。

怯える私に対し、斉條先生が無慈悲に告げる。

『前に出なさい』

すでに十分すぎるほど拘束された私に対して。

『貴女に——少し厳しい拘束を施します』

動けない私の目の前で、斉條先生が手に持っていた端末を操作する。

すると、十数秒もしないうちに拘束室の扉が開かれ、怪しげな仮面を被った人たちが入ってきた。

男の人、なのだろうか。

肩幅の広さやその筋肉質な体つきを見て一瞬そう思ったけど、よく見るとどことなく違う気がする。

その人たちはみんな一様に個性の無い仮面を被っている、全身がラバーに覆われていた。私たちが着ているものよりも薄くて肌に張り付いているのか、細かな筋肉の盛り上がりや張りまではつきりと見える。

見た目はラバースーツというよりは、全身タイツという

方が近いかもしれない。材質はタイツのような柔らかそうなものじゃなく、ラバー特有の張り艶が目立っていたけど。

その人たちは頭まですべてラバーに覆われていて、身長や体格以外の一切の個性が消されていた。

全身パツンパツンの状態だからこそ、股間を見て、その人たちが女性であることはわかった。ただ、体格の良さがすごくて、囲まれるとまるで成人男性に包囲されているような感覚だった。

バレーやレスリングなどの、体格のいい女子スポーツの選手に囲まれたらこんな気分になるのかもしれない。

『水下司さんを拘束します。前へ連れて来てください』

先生がそう合図を出すと、その人たちは私の肩を掴み、強制的にみんなの前に立たされる。二重のラバー越しでも伝わってくるその手の力強さに、刃向かおうという気さえ起きなかった。

みんなの前に立たされたかと思うと、今度は下向きに力が加えられ、私は膝を突いて座り込んでしまう。

斉條先生は拘束室に置かれていた用具の中から、大きなトランクケースを取り出してきた。今朝やられたように、またケースに詰められるのかと思ったけど、人を詰めるにしてはそのトランクケースは小さかった。

「罰則による拘束にはいくつかバリエーションがあります
が……今回は『授業中の集中力の欠如』ということで『罰

則未満』のこれにしましょう」

そういつて取り出された拘束具は、私には何をどう拘束するものかわからなかった。

ただ、妙に柔らかそうな動物の毛皮が目についた。

「これより水下司晃に——『ヒトイヌ拘束』を施します」

アームバインダーが取り外され、私は起きた直後ぶりに両腕が自由になった。ずっと同じ姿勢で固められていたから、前に戻した両腕に血が流れていく感覚が走る。

それが妙に気持ちよく感じてしまい、戸惑っていると、今度は両足のブーツが取り外された。てっきりラバーズーツと一体化しているものだと思っていたから、取り外せるんだと驚く。

私の首から下の身体を覆っているのは、金属のブラとパンツ以外は、ラバーズーツだけになった。

さらに予想外のこと、全頭マスクまで外してもらえた。全頭マスクは内側に突起がある形状をしていたように、それを外すだけで私の耳、鼻、そして口の中が自由になった。

口の中に溜まっていたよだれをなんとかこぼさないように飲み込みつつ、私は咳き込んで自由になった口で新鮮な空気を吸い込む。

いまなら、自由に話すことが出来る。

「あ、あのっ——」

声をあげようとした瞬間、先生が眉を顰め、周りのクラスメイトたちがざわめいたので、私は声を飲み込んだ。

「……不要な発言は禁止されているはずですが？」

斉條先生の冷たい声が解放された耳朶を直接打つ。

私はラバーズーツに覆われた背中に冷や汗を^{びく}くのを自覚した。思わず「ごめんなさい」と言いそうになって、ぐつと言葉を押し込める。

この調子だと、謝罪の言葉を口にするこ^とさえ、罰則の対象になってい^るような気がしたからだ。

幸い、それが正解だったのか、先生は短いため息を吐くだけで済ませてくれた。

「まあ、いいでしょう。『発言未遂』ということ……口枷を変更します」

トランクケースの中には、穴のない赤いボールギャグが用意されていたけど、それを違うものに変えるらしい。

改めて用意されたのは、恐ろしく長い張り子が装着されたものだ^{った}。見た感じは、口枷の部分に張り子が付けられているような、不格好なもの^だったけど、それがどれほどのえげつない構造をしているのかは、そういうのに詳しくない私でもわかる。

だってそれを取り付けられた時、口の中にその張り子が入ってくるのだとしたら——どう考えても、喉を貫く長さ^だったからだ。

(うそ……でしょ……?)

こんなものを啜えたら、窒息して死んでしまう。何かの間違いだと言って欲しくて斉條先生に目で訴えかけたけど、先生は無情にも仮面の人たちに指示を出すのだった。

「装着してください」

その口枷に着いている張り子に、どろりとしたローションのような液体が塗され、テカテカとしたヌメリを生み出していた。

仮面の人たちのひとりに顔と顎を掴まれ、無理矢理口を限界まで開かされる。抵抗しようなんていう気が起こらないほどの力だった。

「あぐう、あ、がつ、うう……っ！」

その開いた口に、先端だけですぐに口の中がいつぱいになりそうな大きさの張り子が、強引に押し込まれる。

「げっ、おごっ、グ、オ……ッ！」

喉の奥が押し広げられるような感覚。張り子は容赦なく口内を満たし、そして先端が喉の奥を突いていた。喉の奥を突かれて、当然吐きそうになるのだけど、仮面の人たちは押し込む力を緩めてはくれない。

(し、死ぬ……っ！)

本気で喉が詰まり死ぬかもしれない恐怖で、身体が暴れる。でも、別の仮面の人に巧妙に抑え込まれていた。

びくん、びくんと身体が意思に関係なく跳ねる。ただでさえ苦しい状態なのに、奥まで押し込むと、口枷の部分に

ついているベルトが口を割り割くように後頭部に通され、ギチッ、と音がするほど締め上げられた。

固定されてしまうと、もう私の力ではどんなに嘔吐しても吐き出せない。喉の奥まで貫き通された異物感だけが残る。

口で呼吸できないから、鼻で息をするしかなく、その鼻呼吸もかなりギリギリだった。一応気道は確保されているみたいだけど、かなり狭められているのがわかる。

今朝起きた時から、呼吸がマスク越しにしか出来なくて苦しいと思っていたけど、その苦しみなんで全然大したことがなかったのだと実感できた。

分厚い首輪があるせいで元々下が向きにくかったのだけど、いまは喉を貫く張り子があるせいで、いままで以上に上を向き続けなければならなかった。張り子は柔らかい素材ではあったけど、顎を引こうとすると途端に異物感が強くなって、嫌でも上を向く状態に戻すことになった。

実はこの仕組みはヒトイヌ拘束に適したものだのだと、私はすぐに知ることになる。

次に拘束が施されたのは、両腕だった。分厚い袋のようなものが、肘を限界まで曲げた状態で被せられ、手の先まで覆う。手の先は手のひらを内側に返す形に固定されてしまい、指先までは拘束されていないはずなのに、手の自由はほとんどないと言って良かった。

その袋の上からベルトで締め上げられ、袋が外れなくな

る。肩の稼働に影響しないように作られているのか、結構自由に動かせたけど、腕が半分になってしまったような状態だし、なにより手を使った作業は何もできなさそうだった。

肘の部分には分厚いサポーターのようなものが袋の上から被された。ただ、サポーターというにはちよつとゴムの部分が厚すぎるような気もした。厚底ブーツみたい、とちよつと古いファッションのことが思い返される。

両腕共にその拘束を施されると、四つん這いになるように言われた。

(四つん這いといわれても……)

肘で身体を支えろということだろうか。恐る恐る身体の前に倒すと、思ったより早くに肘が地面を捉える感覚があって、身体が平行に保たれていることがわかった。

肘の厚みのあるクッションはこういう意図があつただ。

さらに、この体勢だと前を見るためには必然的に首を上に向けなければならず、喉を貫いている張り子の苦しさが少し楽になった気がする。下を向こうとすると途端に苦しくなるので、どんなに恥ずかしくても前を向き続けなければならぬということでもあつたけど。

腕の拘束に問題がないかの確認を挟んだ後、斉條先生が次の指示を出す。

「足の拘束に移ります。そのまま膝を曲げなさい」

言われるまま、膝を曲げて足首がお尻に着くまで折り曲げる。両肘と両膝、その四点で身体を支える形になった。けれど、思ったより身体はふらつかない。肘のサポーターの接地面積が広くて、安定しているからだと思う。

よく考えられているんだな、と私が思っている間に、足にも腕に被せられたようなラバーの袋が被せられる。それは結構びちびちで、あとからベルトで締められるようになっていた。みだりだったけど、それが必要なさそうなくらいに足を締め付けてくる。

足首と足の付け根をまとめるように袋の口にあるベルトが締められ、伸縮性にかかわらず、足をまっすぐ伸ばすことが出来なくなった。ただでさえラバーで締め付けられているのに、さらに締め付けて大丈夫なのか心配になったけど、私にはどうすることもできない。

足にもサポーターのようなクッションが添えられた。そのサポーターは金属の棒みたいなものがあって、さつきしめたベルトに装着出来るようになっていた。

クッションに当たっている部分だけではなく、そこにもテンションがかかるので、足への負担が少し和らいでいる、ような気がする。

ただ、いまの状態だと、足首から先は自由だった。

構造上、脚は手と違って完全に封じることができないのかな、と思う。足首から先だけが自由でも、どうにもならないのだけだ。

そんな風に思っていた私の前に、奇妙な形をした器具が差し出された。

それは、金属のフレームで形作られた靴下、みたいなものだった。それで足首から先も拘束するのかな、という私の予想は、半分は当たっていた。

「これは足首から先に装着する靴下型スイッチです。靴下のように履いて使用します。このように――」

斉條先生がその靴下の形をしたフレームを折り曲げる。ちようど足首を動かしてつま先やかかとを動かすのと似ていた。フレームが変形し、足先が動いているような形だ。

「このフレームは足先の動きを阻害せず、動かした通りに動きます。ただし、この部分、足の甲とかかとの少し上あたりに、スイッチがあるのがわかりますか？」

先生に言われてよく目をこらして見てみると、確かにその部分にスイッチのような機構があるのが見えた。

「このスイッチは、貴女が足首を伸ばしたり曲げたりする度に押されます。そうすると……実際に見た方がわかりやすいでしょう」

そういつて、先生は奇妙な形をした張り子に、ボールが連なっている道具を持ってきた。

なんといえばいいのかわからないけど、足を切り落とされたタコの頭みたいな、張り子の頂点から、数珠をまつすぐにして取り付けたみたいな。

「これがこれから貴女が肛門に入れることになるアナルパ

ールです」

「むあうッ!？」

とんでもないことをさらりと言われて、驚きの声が抑えられなかった。

だって、どう考えても入るような長さじゃない。連なっているボールひとつひとつは入らなくはないだろう大きさだけど、その全部が連なった長さは50センチはある。

お腹を突き破って出てきてもおかしくない。

さらに恐ろしいことに、長いだけがそのアナルパールの真髄じゃなかった。

先生がそのアナルパールを仮面の人に渡して持つように言い、さっき私に見せていた足首から先を拘束する金属フレームを手につく。

その足首を曲げたり伸ばしたりして、足の甲と踵にあるスイッチを起動させると、アナルパールの玉ひとつひとつが、徐々に大きくなった。

「このように、スイッチと連動してアナルパールが大きくなる仕組みになっています。無論、腸が破裂しない程度の大きさで止まるようになっていきますから安心なさい」

先生はそう言いながらボールをどんどん大きくしていった。

（いやいやいやいや！ おかしいおかしいおかしい！ めちゃくちゃ大きくなってるじゃない!?!）

最初はピンポン球サイズだったのが、いまやソフトボー

ルくらいの大きさになっていた。それに伴ってボールが連なったボ長さもとんでもないものになっていて、もはや凶器にしかみえない。

本気で恐怖する私の青ざめた顔を見てか、斉條先生が言う。

「一応、補足しておきますが、これは全く圧力のかからない状態で膨らんでいるから、これほど大きくなっているのであつて、腸の圧力がある状態ではここまで大きくなりませんからね？」

それが何の慰めになるというのだろう。腸の圧力で抑え込まれているだけで、それはつまりそれだけ圧力がかかって苦しい思いをするということだ。

私は先生の正気を本気で疑った。こんなことに荷担している時点で、正気では無いのだろうけど、これに関してはそれを差し引いても酷い。

非難の気持ちが目に出ていたのだろうけど、先生は全く堪えてないようだった。

「故意にスイッチを作動させなければ、ここまで大きくなることはそうそうありません。……わざと限界まで膨らませてしまう生徒もいます」

足首から先を拘束するためのことなのだろうけど、酷いやり方だった。どれほど苦しくても、足首から先を動かして気を紛らわせることも出来ないということだ。

なるべく足首から先を動かさないようにしようと、心に

決める。

アナルパールを持った先生が私のお尻側に回り、金属製のパンツをなにやら操作し始める。蓋が開いたのか、肛門に風が当たる異様な感覚がした。さらに、冷たいアナルパールの先端が押しつけられた。思わず肛門を締めそうになったけど、私の意思に反して肛門は全く動いてくれなかった。何かされているのか、それとももう開いているのがあるたりまえなのか、全然力が入らない。

ずるずると身体の中にアナルパールが入ってくる。ボールの一個一個が入る度に、排泄物が逆流するような、気持ち悪い感触が背筋を這い上がってくる。

(うう……これ、もう、この時点で苦しい……つ)

まだボールは全く大きくなっていない状態のはずなのに、すでにお腹の中がいっぱいになっている感覚があった。便秘の時の感覚に少し似ている。

最後にタコの頭のような形をした張り子が、肛門に押し込まれて、挿入作業は終わったみたいだった。あの奇妙な形をした張り子は、括約筋にぴったりはまり込むように作られていたみたいで、常に排泄しているような感覚になってしまった。頭がおかしくなりそう。

思わず括約筋を意識して締めると、やっぱり何か違和感がある。

そして、まっすぐ伸ばした足首にさっきの拘束具が取り付けられた。思わず足首から先を動かすようになるのを、

堪えなければならなくなる。

外から見た拘束度合いとしてはみんなとあまり代わりがないけど、動けば動くほど自滅してしまうような状態で、拘束されている感じはみんなよりも酷かった。

「最後に、ヒトイヌとしての飾りを取り付けます」

（まだ何かあるの……？）

すでに疲労の溜まっていた私の耳に、イヤーマフ兼犬耳が取り付けられる。それは口枷と連結され、外れなくなる。

さらに、お尻に差し込まれている張り子の飛び出している部分に、ふさふさのしっぽ飾りが取り付けられた。四つん這いの体勢で、ちょうど先端が床に届かないような長さだった。

「括約筋を締めてご覧なさい」

先生に言われて、さっきのように意識して肛門を締めて見る。すると、ふさふさの尻尾飾りが左右に揺れた。

どうやら、括約筋に締め付けられている張り子に何か仕掛けがあるみたいだ。

「ヒトイヌ拘束をされている時の返事は、尻尾を動かすことで行いなさい」

そう言われて反射的に頷きかけて、慌てて尻尾を動かすことで堪えた。

先生の目が一瞬冷たくなったけど、見逃してくれるみたいだった。

「よろしい。では授業を再開します。壁際に戻りなさい」
そう言われ、四つん這いで移動を始めようとして、思わず足首から先を動かしてしまった。スイッチが入り、差し込まれたボールが若干大きくなって、お腹の底から突き上げるような衝撃が襲う。

「んぐう——っ！！」

悶絶して転がりそうになるのをなんとか堪えて壁際に戻る。ぶるぶると身体が震えてしまっていたけど、なんとか堪えた。

心配そうに私を見ている子が何人かいたけど、それに反応する余裕もなく、ただ耐えることしかできなかった。

苦しみながら『拘束』の授業を受けていた私は、このときはまだ知らなかった。

いまの私の状態で——改変された次の授業を受けることがどれほど辛く、苦しいことなのか。

幸い、ヒトイヌ拘束に加えてさらに拘束をされないうちに『拘束』の授業はなんとか終わった。

（ラテックスボールって、見た目は変で笑っちゃうようなものだけど、全然動けない立派な拘束の一種なんだ……）
体感では一回しか『拘束』の授業は受けていないはずなのに、普通は知りようもない拘束のことにすっかり詳しくなってしまう気がする。

私は短くなった両手両足を必死に動かして、教室移動を行っていた。

ヒトイヌ拘束を施された身体では、普通の拘束をされたクラスみんなが歩くのについて行くだけでもやつとだ。

目の前でクラスメイトのラバーに包まれたお尻が動くのが見える。

こうして視点が下から変わると、少しは慣れてきたと思っていた私たちの格好がいかに異常で、いやらしく見えるものか进行い知らされてしまう。

テカテカしたラバーの照りや張りが、一步步度に微妙に変化し、まるで異性を誘うように動いているようにさえ見える。それから目を逸らしたくても、身体の動きを限りなく制限された私は辛抱して四つん這いで歩き続けるしかなかった。

整然と歩く列の中で、一人だけ地べたを歩かされる屈辱や羞恥心は想像以上に強い。

それだけじゃなく、少し身体を動かす度に、自分に施された拘束の厳しさを思い出させられてしまい、非常に辛かった。

「フウ……フウ……フウ……ッ！」

喉の奥まで貫く張り子のせいで、まったく口呼吸が出来ない。

不自由な身体を動かして呼吸は荒くなるのに、満足に呼吸が出来ないせいで、苦しみだけがどんどん増していって

いた。

その苦しみに気を取られて、足首から先を動かしてしまつたら、さらに地獄を見ることになる。

お尻に差し込まれた尻尾飾り付きのアナルパールは、足首から先を拘束する金属フレームに仕込まれたスイッチと連動している。そのため、足首から先を動かしてしまつと、アナルパールの玉ひとつひとつが徐々に大きくなるという残酷な仕掛けがあった。

入れられた時点ですら、ボールはピンポン球くらいの大きさで、連なつた長さは五十センチ近かつたのに、それがさらに太く、長くなるとしたら。

どれほどの苦しみを与えてくるのか想像もできない。

すでに『拘束』の授業中に何度かうっかり動かしてしまつていて、かなり大きくなっているのが身体感覚でわかつた。自分では見えないけど、お腹もぼっこり膨らんで来ているんじゃないだろうか。

斉條先生は破裂はしないようになっていると説明してくれたけど、それが何の気休めになるのだろう。

いっそお腹を突き破ってくれた方が楽だ、と思えるくらい苦しみを与えるのかもしれない。

それを避けるために、なるべく足を動かさないよう、努力するしかなかった。

完全に拘束された状態も辛いけど、中途半端な自由を与えられているというのは、余計に辛いものなのだとよくわ

かる。

さらに、この拘束をいつ解いてももらえるのかもわからない。この苦しみがいつまで続くかわからない状態が、また余計に辛さを倍増させていた。

苦しみに狂う前に解放されるように祈るしかない。

そんな私の切実な祈りをあざ笑うかの如く、次の授業は残酷な科目だった。

その科目の名前は——体育、という。

正直、時間割で見かけていたときから疑問だった。

この訳のわからない、改変された世界において、体育という授業が成立するのだろうか。

私だけでなく、みんな運動に向かない格好をしているからだ。

奇妙なラバーシューズを着せられ、踵の高いブーツのような靴で、首に分厚い首輪は巻き付いているし、そもそも後ろ手に拘束されているのだから。

歩くだけなら謎のバランス感覚でどうにかなっているけど、走ったり跳ねたり、ボールや道具を使ったりすることはまずできないだろう。

そんな状態で『体育』で何をするというのか。

体育の授業は、その時の内容によって運動場か体育館で

行われる。

今日は運動場の日のようで、私たちは例の鎖によって連ねられたスタイルで運動場へと向かっていた。

朝目覚めてから屋外に出るのはこれが初めてだ。

教室移動の際に窓から外は見えたけど、歩くのに集中しなければならなかったし、学校の外がどんな様子なのかはつきりとはわからなかった。

けれど運動場は外の車道に面している。しきりとしてフェンスがあるけど、外の様子は確実に見れるはずだった。（この変な世界の改変が、せめて学校内で留まっていますように……！）

一縷の希望を抱いてそう願う。脱出するにせよ、何にせよ、この拘束から逃れるためには逃げる先が必要だった。

そう考えているうちに、列の先頭が校舎の入り口に到着したみたいだった。ドアが開かれる音がして、外の風が流れ込んでくる。

眩しい光に一瞬目がくらんだけど、私は外に出ることができた。

ぱっと見は、何も変わっていないように見える。

よく整備された広い運動場。同じく整えられた藤棚や植え込み。校舎側から見て、右手側にプール、左手側にはテニスコートがある。

そして、運動場の向こう側、その先に外の景色が——大きな道路が見えた。

肝心なのは、道行く人たちがどんな格好をしているか。昨日までとなんら変わらない姿で生活を送っているのか、それとも私たちのような異様な格好をしているのか、だった。

（お願い……どうか普通でいて……っ！）

そんな私の祈りが通じたのか、一人目の通行人は普通の格好をしていた。たぶんサラリーマンなのだろう。ごく普通のスーツに身を包み、携帯電話を耳に当てながら急ぎ足で歩いている。

普通の格好をしていたことにほっとしたけど、その人は男性だった。さっきまでの授業を受け持つ先生の中には、普通の格好をした男の先生もいたから、この人だけでは外がまともなのか、それともおかしくなっているかの判断は出来ない。

他の人が通りかかって欲しいなと思っていると、その人が通話を終え、携帯電話をしまった。

そして——こつちを見た。

背中に氷でも付けられたのかと、一瞬思ってしまったほどの怖気だった。

その人は明確に、私を、私たちを見て、楽しげに笑っていた。

（もしか、して……この格好を『そういうもの』だって…

…わかって……認識してる……？）

男の人が向けているのは、そういう好奇の視線であると直感出来た。

私たちの格好が普通ではないことを理解している。明らかに私たちの格好を見て、欲情しているのがわかる笑みだった。

改変の有無に関わらず、私たちくらいの年齢の女子を見て興奮するのぞき魔だということも考えられたけど、どうもそうではないみたいだった。

次に現れた通行人も、同じような視線を私たちに向けてきたからだ。年齢的には五十歳くらいの男性だった。歩きながらにやにやと嫌らしい視線を向けて来ている。

まるで野鳥の観察でもしているかのように自然に、私たちに対して欲情した視線を向けてきている。

普通に拘束されたみんなの中で、一人ヒトイヌ拘束を施されている私の姿はよく目立つらしく、視線は必ず私に集中した。

それが恥ずかしくてたまらなかった。けれど動揺して呼吸を乱すともっと苦しいことになるので、必死に堪えなければならぬ。

「フウ、フウ、フウ」

浅い鼻呼吸を繰り返し、なんとか空気を取り入れる。

みんなが歩くのに合わせて砂埃が立っていたら、地面に近い位置に頭がある私は地獄だったけど、不思議なことに

砂埃はほとんど立っていないかった。

おかげでギリギリではあったけど、なんとか無事に運動場の中心まで移動することができた。みんなが綺麗に並んでいる中、ひとりだけ四つん這いになっているものだから、さっきまでより余計に目立つ。

通りがかった人たちが私たちを見ている。視線を逸らしたいけど、俯けば苦しくなるのでできなかった。

みんなは通行人に見られても特に何も感じてないのか、平然として立って授業の開始を待っている。

ふと、通行人の中に、明らかに異常な格好をした人が混じっていた。大人の女のんだ。ビジネススーツを着た、胸の大きな人。

その人が着ているのは、ぱっと見は普通のビジネススーツに見えるけど、素材が明らかにおかしかった。ラバーで出来ているのか、身体のラインがハッキリ見えてしまっている。特にパンツルックなために、下半身のラインが丸わかりだった。

私たちの方を見たその人は、なんとも奇妙な表情を浮かべていた。哀れんでいるような、悲しんでいるような、恥じらっているような。

その人自身もすごい格好をしているのに、それはあまり意識していないようだった。

どういう状態にあるのか気になったけど、その人はすぐに歩き去ってしまった。

ただ、ひとつわかったのは、仮に拘束が解かれて、学校から飛び出しても逃げる先がないということだった。

変化は、学校内だけじゃなく、学校の外にも及んでいるのだから。

男の人たちが堂々と覗き見をしていたことを考えると、かえって酷いことになる可能性さえある。

でも、先ほどの女の人が普通に仕事をしていた風だったところを見ると、格好や状態は変わってしまったとしても、そこまで酷い扱いはされていないのかもしれない。

というか、そうでも思わなければ、耐えられなかった。

通行人から見られる羞恥に震えながら待っていると、体育の左藤先生が校舎から出てきて、私たちの前に立つ。

「よし、全員揃ってるな？ 授業を始めるぞ」

野外の運動場。

拘束が解かれる様子はなく、この格好のまま一体どんな授業が行われるというのか。

私は逃げ場がなくなってしまったことに関する絶望から逃避するために、その内容に集中することにした。

「さて、今日は前回に続いて……ん？ なんだ今日はヒトイヌにされてる奴がいるのか？」

今頃気づいたのか、先生が私を見てそう呟く。目立つだろうになんで気づかないのだろう、と私は思ったけど、こ

れは認識の違いが如実に表れていた。

改変された世界に順応している先生にとって、生徒が拘束されていることは珍しいことじゃない。

特にヒトイヌ状態の私はみんなの間にいると、しゃがみ込んでいようなもので、列の隙間を意識しない限り気づけないのだ。

先生は面倒くさそうに頭をぐく。

「あー……罰則じゃないのか。だとすると……いや、まあいいか。みんな着いてこい」

ぶつぶつ一人で呟いたのちに、投げやり気味に結論を出したようだった。

そういつて先生がみんなを誘導した先は、昨日までは体育で使う用具が入れられていた倉庫の前だった。

先生が少しさび付いたシャッターを持ち上げると、中に置かれていたものの姿が見えてくる。

倉庫は外見こそ変わっていなかったけど、中の様子は一変していた。何に使うのかわからない道具が山ほど保管されている。

ただ、その中でも目を惹いたのは、入り口からすぐの場所にあった大きな――人力車のようなものだった。

それはよく有名な観光地で見かける人力車と同じで、人が一人乗れるようになっていた。ただ、引き手が持つべき部分がなく、ある程度は自力で座る部分の水平を保つようになっているみたいだった。

前に引く力さえあれば、引っ張って動かせそうな、そんな様子だった。

「まずいつも通り二列になって並べー。それから、水下司はこっちに来い」

先生は私の首輪から鎖を外し、みんなの列から連れ出した。そして、人力車の隣にいるように言われる。先生は準備のためにすぐみんなの下に戻っていった。

いまならみんなの連なりからは外れたから、逃げる事が出来る。

けれど、ヒトイヌ拘束を施された状態で、どこまで逃げる事が出来るだろうか。それに、逃げたところで、どこにいけばいいのか。

学校の外にも改変が及んでいることを知ってしまった私は、どうしようもなく、その場に居続けることしか出来なかった。

そうしている間に、先生が準備を進めていく。みんなを人力車の前に二列で並ばせ、その腰を太い鎖で連結している。

それで人力車を引かせるつもりなんだろうか。確かに、人数が多いから人力車を牽くことは出来るだろうけど。テレビで見た犬ぞりレースの光景を思い出す。

見ようによっては奴隷が働かされているようにも見えるのだけど、そう感じないのは繋がれているみんなが協力的だからだろうか。

運動が苦手という意味で気怠そうにしている子は何人かいるけど、本気で嫌がっている様子の子はいない。

そうするうちにみんなの準備が終わったようで、先生が私のところに戻ってきた。

「おまえはこっちだ」

首輪にリード代わりの鎖がかけられ、私はみんなとは逆側——人力車の裏側に移動する。

いったいどうするのかと思っていたら、先生はあろうことか、私の首輪に繋がる鎖の逆側を、人力車の後部に括りつけた。

「ングウウ!？」

それが意味することを察して、私は声をあげる。

先生はちらりと私を見下ろすと、素っ気なく言う。

「それほどスピードを出すつもりはないが、転ばないよう気をつけてしっかりついて来い。転んだら死ぬほど苦しいぞ」

(そんなの、少し考えたらわかるわよ!)

信じられない思いだった。この様子だと先生は人力車の上に乗るはず。そうなると、私の様子は振り返らない限り見えないはずで、もし仮に転んだら気づかれずにしばらく引き摺られる可能性が高いということだ。

ただでさえ苦しい状況で、そんなことをされたらどうなるのか。

本当に死ぬかもしれない。

私は顔が青ざめるのを自覚しつつ、思い直してもらおうと先生に取りすがろうとしたが、先生は軽くかわして人力車に乗り込んでしまう。

「よし、いくぞ!」

先生の号令が非情にも響き、みんなが歩き出すのがわかった。

みんなに牽かれた人力車が動き出し、当然私の首輪も引かれて——地獄の行軍が始まる。

目の前で、私の首輪から伸びている鎖が揺れる。

鎖はそれなりの長さがあったため、引つ張られるまでに余裕はあったけど、少しでも歩みが遅れればあつという間にテンションがかかって私の首を絞めるだろう。

その鎖が繋がった先、先生の乗る人力車が前に進むのに合わせて、私はヒトイヌ拘束をされた状態で必死に前に進んでいた。

四つん這いで動くこと自体が難しいのに、強制的に歩かされるのは余計に辛かった。

教室移動の際、クラスメイトのみんなと繋がれていた時も条件は同じだったはずだけど、あれでもみんなは私を気遣って歩くのを遅くしてくれていたようだ。

いまはみんなも体育の先生の指示に従うことしかできないためか、さっきより動くスピードが明らかに速い。

私は短く折りたたまれた手足を必死に動かして、それになんとかついていく。

「フウツ、フウツ、フウツ……！」

鼻でする呼吸は苦しくて、口から空気を取り込みたいのに、喉の奥まで貫く口枷がそれを許してくれない。

喉を犯す張り子がただでさえ苦しいのに、呼吸が必要になつてさらに苦しくなる。吐きそうになるけど、もしこんな状態で吐いてしまったらそれこそ喉が詰まって窒息してしまう。根性で堪えるしかなかった。

さらに、四つん這いでの移動は文字通りの全身運動で、ラバースーツに包まれた身体に熱を籠もらせてしまつていた。

全身が汗ばんで気持ち悪い上、額から垂れてくる大粒の汗も拭うこともできない。もしそれが眼に入ってしまったら、私は視界まで奪われることになる。

ついていくのだけで精一杯で、頭の中が真っ白になつていく。次第に考える余裕もなくなり、ただひたすら身体を動かすことだけしかできなかった。

「よし、止まれー！」

先生の指示が聞こえて、目の前の人力車が止まる。

少し休める、と思つて必死に鼻で呼吸をして息を整えていると、先生が振り返つて私の様子をちらりと確認していた。

すぐに視線を前に戻してしまつたけど、一応注意を払う

つもりはあるみたいだった。

歩いているときは無我夢中だから、定期的に振り返つてくれているのかどうかはわからないけど。

ふと、私は学校の外、運動場に面した通りから見ている人が増えていることに気づいた。

立ち止まつて私たちの方を見て、携帯電話を構えている人もいる。

彼らが浮かべている表情はどう好意的に解釈しても性的な関心が含まれたもので、私たちが人力車を牽いている・牽かれている様子を楽しんでた。

そういう視線を向けられているということがとても恥ずかしく、逃げ出したくなるけど、もちろんそんな自由は私にはない。

「よし、行くぞ！」

先生の無情な号令に合わせて再び動き出す人力車に、ついていくしかない。

地獄の行軍はまだ始まつたばかりだ。

人力車を牽いているクラスメイトたちの様子は、『一条乱れぬ連携』という表現が的確だった。

そんなに団体行動が得意な子ばかりじゃなかったはずだけど、いまに關していえばそれを当たり前のように行っている。みんな合図もなく足を揃えて動かしについて、テレビ

とかで見る、外国の軍隊の行進みたいだった。

それでも、たまに足並みが乱れることがあって、そのたびに先生は一度みんなを止めた。

そして手に持った卓球のラケットのような道具で、足並みを乱した子のお尻を引っぱっていた。とても痛そうなお音が響いて、悲鳴がうめき声として聞こえてくる。

それは本来可愛そうだと思うべきことだったのかもしれないけど、引き摺り回されている私にとっては貴重な休憩時間だったので、ありがたくさえ感じていた。

「フウ、フウ、フウ、フウ……ッ」

全身から吹き出す汗がラバースーツの中に溜まっているのがわかる。特に肘と膝あたりの違和感とはとてもなく大きく、まるで水に漬けているかのようだ。こんなに汗を流してしまつて水分は大丈夫なのだろうかと不安になる。

顔まで汗だくなので、額や頬に張り付いた髪の毛が非情にうっとうしい。振り払おうにも、私には何の自由もないから、どうすることもできない。

また人力車が動き出す。それに慌ててついていきながら、私はあとどれくらいこれに耐えればいいのか、疑問に思っていた。

（授業時間は通常七十五分……もう半分はすぎた……？）
人力車は運動場のトラックを回っているだけで、ゴールらしきものがあるわけじゃない。体育の時間が終わることだけが、地獄の行進から解放される道だった。

私は苦しみから早く逃れたいばかりに、歩かされながら校舎の時計を見上げてしまった。あと何分耐えればいいのか、知りたかったから。

けれど、それは非情に愚かで、浅はかな思考でしかなかった。

（え……？ うそ……でしょ……）

時計の針は確かに進んでいた。

けれど私の願いとは裏腹に、授業時間は半分もすぎていなかった。

それどころか、授業が始まってからまだ十五分しか経っていないということに、気づいてしまった。

地獄の行軍をあと一時間近くも続けなければならない。実際には片付けとか次の準備とかでもう少し早く終わるのかもしれないけど、それでもいままでの倍以上の時間を歩き続けなければならない。

すでに体力も尽きかけて、ふらふらなのに、あと一時間間も。

（そんなの……むり……）

絶望して手足の動きが止まってしまった。

先に行く人力車がそれを斟酌してくれることはない。

鎖にテンションがかかって、強く首が締まった。

「グウッ！！」

慌てて身体を動かし、なんとかついていこうとしたけど、首を絞められた苦しみと動揺は確実に混乱をもたらした。

ていた。

動かさないように、と意識していたことを忘れ、足首から先を動かしてしまう。

いまの私の足首から先は、金属でできたフレームのようなもので拘束されており、足首から先を動かすと、フレームに仕込まれたスイッチが押されることになっている。

そのスイッチは私の肛門に挿し込まれたアナルパールに備わった機能のスイッチになっている。

その機能とは、アナルパールを形成する玉ひとつひとつが大きくなるというものだ。

挿し込まれる時の状態でさえ、五十センチ以上の長さだったというのに、その膨張機能によって、私の腸内はさらに暴力的な長さ太さのものによって蹂躪されることになる。

「——ンギッ！！」

お腹がまた一段階膨らんだような気がした。身体の中から下から圧迫されるような感じがして、激しい辛さが襲いかかってくる。だけどその辛さから逃れる方法は無い。金属の貞操帯にしっかりとホルドされたそれが抜けることは無いからだ。

私がいくら息んでも、それが排出されることはなく、苦しみが和らぐこともない。

一瞬目の前が真っ暗になるほどの苦しみ。それを堪え、手足を動かす。そうしないと首が絞まって

さらに苦しいことになるのはわかっていたからだ。

きつといまの私はすごい顔をしているのだろう。女の子が浮かべちゃいけないような、必死の形相をしているのだと思う。

それを恥ずかしく思う余裕もなく、私は両手手足を動かしてなんとか人力車についていこうとした。

けれど、そんなギリギリの綱渡りがそう長く続けられるはずもなく。

焦るあまり、前に出した肘に角度がつきすぎて、そのまま滑るようにして転んでしまう。

「アぐウッ！！」

胸を地面に打ち付けて衝撃が走る。

胸はびったり身体に沿って固定された金属のブラジャーで覆われているから、衝撃がダイレクトに走って来て息が詰まる。

さらに、ただでさえ内側から押し広げられて苦しいお腹が地面に押しつけられ、苦しみが倍増してしまった。

「ぐ、ぎゅッ！」

私が転んだことに気づいていないのか、人力車は無慈悲に前に進む。あつという間に鎖の遊びがなくなり、私は首輪を引っ張られて引き摺られ、息ができなくなった。

苦しみの波状攻撃。

ひとつひとつが的確に私を追い詰めていく。

（死ぬっ、死んじゃうっ！）

あまりの苦しみにパニックを起こし、自由に動かない身体を暴れさせてしまう。

それは結果として最悪の事態を引き起こした。

足首から先を何度も動かしてしまい、お腹の中のアナルパールをどんどん膨らませてしまったのだ。

ボコッ、と音がしていてもおかしくないほどに、私のお腹は膨らんだと思う。それを私が見ることはできなかったけど、妊婦もこうはならないレベルに膨らんでいただろう。

それが与えてくる苦しみ、辛さは目の前に星を瞬かせ、一瞬で意識を飛ばしてしまうほどの衝撃だった。

けれど、その苦しみの大きさをゆえに気絶からすぐに叩き起こされ、また激しい苦しみに悶えることになる。

(も、もう、だめ……)

いよいよ意識が遠くなってきた。死の気配をすぐ近くに感じ、私は死を覚悟する。

でも、これでいいのかもしれない、と遠ざかる意識の中そう思った。

この改変されたおかしな世界で今後も生きていくことを思えば、いつそこで死んでしまった方が私としては楽かもしれないからだ。

何年もこんな異常な授業を受け続けるなんてそれこそ地獄だし、仮に学校を卒業できたとして、あの調子じゃきつと外での扱いも似たようなものなのだろう。

そんな中でまともな意識を持ち続けるなんて無理だ。いつか解放されることを信じられるほど、私は楽観的ではいられなかった。

抵抗をあきらめ、脱力する。もう身体を暴れさせる元氣も気力も残っていないかった。

すると、死に瀕した人間の生存本能なのだろうか。

全身を襲っている苦しみはそのままなのに、急にあそこが熱くなり、もどかしい快感が沸き上がり始めた。

呼吸できない苦しみも、全身を引き摺られる痛みも、お腹を突き破りそうな内側からの苦しみさえも、気持ちよく感じてしまう。

脳が誤作動を起こしてしまっているのかもしれない。

あるいは本格的に狂ってしまったのか。

(もう、どうでも、いい……)

私は千切れてしまいそうになる意識を感じ、身体を震わせながら、最期の絶頂に達しようとしていた。

そのとき。

「おおーい！ イヌが倒れとるぞーっ！」

外から見えていた通行人が、先生に向けてそう叫んだ。

先生はその呼びかけで私が倒れていることに気づいたのか、慌てた声でみんなを停止させる。

首を締めていた力が緩み、血が頭部に通ってくるのがわ

かる。息ができるようになって、窒息死こそ免れたものの、膨らんでしまったアナルパールは戻らない。

「ングッ、ンアアッ！」

文字通り逝く寸前まで高められていた死の快感が、身体の中で暴れる。肩や腰が勝手に震え、手足が跳ね回った。

その刺激が最後の後押しになったのか、私はいままで経験したことのない絶頂を迎え、その意識は完全に闇に落ちていった。

改変された世界の片隅で、浮かんで消えた

気づいた時、私はベッドに寝かされていた。

起きたばかりでぼんやりとする思考のまま、身体の状態を確認する。

施されていたヒトイヌ拘束は外されたみたいで、普通に仰向けになれていた。お腹も引っ込んでいるところを見ると、あの凶悪なアナルパールも外してもらえたみたいだ。

開け放たれた窓から、さわやかな風が吹き込んで来ている。風の動きが、むき出しの頬に感じ取れた。

見るとはなしに、ぼーっと天井を見ていると、

「水下司さん、眼が覚めた？」

保険医の古山さんがそう声をかけてきた。私が視線をそちらに移すと、『いつもの』ぴっちりとしたミニスカのラバーナース服を着た古山さんがいた。

ピンク色の薄いラバーで出来たナース服は、その道を目指している子たちにとっては憧れの象徴だ。張りのある乳房の頂点をくつきり浮かし出しているそのラバーの薄さは、それだけ古山さんがラバーを着こなしている証拠だった。私ではきつと破いてしまうだろう。

「まったく、斉條先生も人が悪いんだから。拘束は次の授業のことも考えてしないといけないのに。そもそも、明確な校則違反を犯していない生徒に対してやりすぎよ。左藤先生もちやんと拘束度合いを確認しないで授業に参加させ

るなんて……」

古山さんはそう言って怒ってくれている。

やっぱり、斉條先生はやりすぎだったらしい。

「ちゃんと学園長に報告を上げておいたから安心してね。ふたりには厳正に処罰がくだされると思うから」

「あり、がとう、ございます……」

お礼を言おうとして、声がかすれていることに驚いた。古山さんが水を持ってきてくれる。コップ一杯の水が、とても美味しかった。

「ちよつと脈拍を計らせてね……うん。正常に戻ってる。

顔色も悪くないし……もう大丈夫そうね」

「あ、あの、それじゃあ……」

私がそう求めると、心得ているとばかりにアームバイندرを持って来てくれた。

それを見た私は、ほっとする。

腕を自由に動かせるのが、なんとも落ち着かなかったのでありがたい。

古山さんにアームバイندرを被せてもらい、しっかりと固定してもらう。そうなると、腕を動かそうとしても、アームバイندرに包まれている腕はびくともしなかった。

「全頭マスクも被せるわね。あーんして」

大人しく頭の大半を覆う全頭マスクを被る。内側にある突起が私の口、鼻、耳の穴を塞ぎ、視界以外のすべてが封じられた。

歩くことと見る以外、すべての自由が封じられた状態。

それはとても——安心する状態だった。

全頭マスクに仕込まれたイヤホンから古山さんの声が聞こえてくる。

『もうとつくに授業は終わっているから、自由に動いても大丈夫よ。水下司さんは部活には入っていないから、寮に帰ってもいいし』

頷いてベッドから降りようとする、古山さんが私の足にブーツを履かせてくれた。ブーツはつま先立ちを強制する踵の高いもので、やはりこの状態がとても落ち着く。

立ち上がった私は、古山さんにお礼の意味を込めて頭を下げ、保健室の扉を潜った。

(どうしようかな……ん?)

これからどうしようかと思っていると、保健室の扉の脇に美夜が立っていた。

美夜は私が保健室から出てきたことに気づくと、心配そうな目をして近づいてくる。

(あ、そうか……心配かけちゃったのね)

体調管理や蟬の行き届いている寮生が、保健室に担ぎ込まれることはそうそうない。

それなのに、私が保健室に担ぎ込まれたものだから、美

夜はとても心配したはずだ。

私は大丈夫だという意味を込めて、美夜に近づくとその口に自分の口を合わせた。

途端に身体の中で蠢きだした棒が、私たちの深いところを刺激して、じんわりとその場所に快感を生み出し始めた。私も美夜も腕は拘束されているから、相手の身体を弄ってあげることはできない。

まあ、自由だったとしても金属のブラと貞操帯がそれを許してはくれないのだけど。

私は美夜を壁際に追い詰め、口を合わせたまま、美夜の足の間に自分の片足を割り込ませる。そして太ももで美夜の股間を突き上げるように押し上げた。

もちろん貞操帯に阻まれて直接刺激を与えられるわけではないのだけど、貞操帯自体を押し上げれば、中に埋め込まれている部分にも動きが伝わる。

それ自体はとても微弱な動きではあるのだけど、全身を拘束されて刺激に乏しい私たちにとっては「互いに与える刺激」としては十分なものだ。

「ンンッ、ンウッッ」

美夜は可愛らしく肩を震わせ、私の与える刺激に浸っていた。美夜の身体が熱を帯び、感じているのがラバースーツ越しにも伝わってくる。

私は美夜が絶頂する寸前で足を引き、口も離れた。おあずけを喰らった形になる美夜は不満そうに見つめてくる。

私は内心いじわるな気持ちになりながらも、視線と仕草で「寮に帰ろう」ということを伝えた。

放課後である以上、寮生である私たちは学校外に出る以外ならどこで何をしてようが自由なのだけど、廊下で弄り合うのは疲れる。どうせならちゃんと落ち着けるところで美夜といちゃつきたい。

美夜もそのこと自体は賛同してくれているみたいだったけど、同時におあずけされたのは不満だったようで、歩き出そうとしたら肩口に軽い頭突きをしてきた。全然痛くは無い。

(ごめんごめん)

さらに頭突きしてこようとする美夜をかわしつつ、私はそういう意思を込めて美夜の眼を見る。美夜は「ムーツ」と不満そうな声で唸りつつも、頭突きをするのはやめてくれた。

ふたりで並んで校舎の入り口に向かう。

校舎の入り口には、行き先ごとにコンベアーがあり、通常はそこで箱に詰めてもらって運ばれることになる。

けれど、今日はふたりいるということで、ふたりでしか使えない特別なルートを通ることにした。

広いエントランスの端、細長いロッカーのような箱がいくつかけられている。その前に置かれたタッチパネルを操作して、そのうちのひとつを開いた。

ロッカーの中は何も入ってなくてがらんだった。美

夜に視線で合図すると、まず美夜がそのロッカーの中に入っていく。ロッカーの中は狭く、美夜が入った段階でほとんど空きスペースはない。

そこに、私は無理矢理身体を押し込んだ。美夜と絡み合うようにして密着しながら、身体をロッカー内のスペースに納める。お互いの体温がハッキリ感じられた。

無事身体を押し込めることに成功すると、それを検知したロッカーの扉が自動的に閉まる。

扉には内側に若干厚めのクッションが仕込まれていて、それに押し込まれるようにして私たちはさらにぎゅうぎゅう詰めになれてしまう。

ロッカーの中には小さな灯りが灯っているとはいえ、美夜の輪郭くらいしかわからない。私は目の前の美夜の顔に口を寄せ、美夜も同じように口を合わせてくれた。

ぎゅうぎゅうで動けない私たちの体内で、バイブ機能が動き出す。互いに呼吸が荒くなり、それがまた興奮を高めている。互いに呼吸が荒くなり、それがまた興奮を高めている。

そうこうしているうちに、ロッカー自体が動き出す。このロッカー自体が移動手段になっているのだ。

二人以上でなければ使えないけど、仲のいい友達がいれば退屈な移動時間の暇を潰せるということで、人気の移動手段だった。

美夜と楽しみながら移動すること数分。

徐々にロッカー内の空気が薄くなって来て、頭がぼーっ

とし始めた頃、目的地に到着した。

扉が開いたので、名残惜しいけど外に出る。ロッカー内に籠もったむわっとした熱気が、涼しい外気に霧散していった。

蒸れたラバースーツが冷えていく。

そういえば、体育の授業の際にラバースーツ内に大量の汗をかいたはずだけど、保健室で目覚めた時には特に不快な感じはしなかった。

もしかすると、気を失っている間に一度ラバースーツを脱がされていたのかもしれない。

医療行為であることはわかっていても、無防備な裸を見られたと思うと少し恥ずかしい。

ここに入寮してから、自分でも自分の裸を見たことは数えるほどしかないから、余計にそう思った。

「ムーウ？」

考え込んでいる間にロッカーから出てきた美夜が、不思議そうに私の肩を頭で小突く。

私は考えるのをやめ、美夜に向かって「なんでもない」と首を横に振った。

ふたり連れだつて『談話室』に向かう。談話室は、私たち寮生が自由に喋れる数少ない場所だった。

部屋に入る前に、管理人さんにマスクを外してもらい、中に入る。談話室は広いカフェのような雰囲気だった。すでに利用している他の子たちも、賑やかに話している。

私が空いていたソファに座ると、美夜は隣に座ればいいのか、私の膝の上に乗ってきた。

「ちよつと美夜……重いんだけど」

背もたれに身体を預ける。アームバンダーはそのままだけど、当然それを見越して設計されているこのカフェのソファは、腕が入る分の溝があり、身体を背もたれに預けても腕が強く圧迫されることはない。

美夜は楽しそうに笑みを浮かべつつ、身体の前面をほとんど密着させるようにして、私の動きを封じていた。

「心配させた罰だよっ。晃ちゃんが倒れたって聞いてびっくりしたんだからね」

言いつつ、美夜が私の口に自分の口を合わせる。私はそれを受け入れつつ、応えた。

「心配かけたのは……んっ、悪かった……わよ……むあ……」

「んう……寝不足だったの？ はむ……変な夢を見た、とか？」

「そんな、んう、ことはなかった、んっ、だけど……」
舌と舌を絡めるディープキスをしながら喋るものだから、喋りにくい。

美夜に問われると、改めてどうして自分が倒れてしまったのかわからなくなる。直接的な原因は斉條先生と左藤先生のせいなんだけど、間接的にいえばそうされてしまう原因になった集中力の欠如だ。

いま思い返してみると、今日はどうしてあんなに当たり前のことに集中できなかったのかがわからない。

箱詰めによって運ばれるのなんて毎日のことだし、教室移動の並び順も変更があったわけじゃないし、罰則で拘束されている生徒を見るのだって——いつものことなのに。

自分というのも何だけど、私は真面目な方でそういうことで怒られたことは今まで一度もなかった。

「なんで、かな……？」

いま考えても、どうしてそんなに気もそぞろになつていたのかわからない。

まるで、起きながら変な夢でも見ていたかのような。

美夜はしばらくデープキスを続けた後、疲れたように私の肩口に顎を乗せてきた。

甘えるように摺り寄せてくる美夜の頭を見ながら、私は気になっていたことを聴く。

「そういえば、違うクラスなのによく私が倒れたってわかったわね？」

「終わりのホームルームでうちの担任の先生が教えてくれたの。体育の授業中、保健室に運ばれた生徒がいるって。晃ちゃんの担任の先生にはきびしい罰があるらしいよ」

「……そうなんだ」

処罰はあると聞いていたけど、この学校の教師が厳しい

と強調するくらいだから相当きついんだろう。

ざまあみろ、とちよつと思つてしまった。

その後、美夜とじゃれ合いながら話をしていたら、夕食の時間になった。

いつも通り食堂に行つてご飯を食べ、そのあとはトイレに寄つてから自室に戻る。

しばらく部屋で待機していると、管理人さんがやつてきてアームバインダーを外してくれた。

「それじゃあ、勉強頑張つて。時間までには済ませて、寝るようにね」

「ンム」

口枷はそのままなので頷くことで管理人さんに応える。

管理人さんはアームバインダーを部屋の壁にかけると、すぐに部屋を出ていった。扉が閉められ、外から鍵がかけられる。勉強に集中するようという配慮だった。

（一昔前の囚人みたい……つて入寮当時は思ったわね）

いまでは勉強中邪魔が入ることもなく、気が散ることもない良い仕組みだと思つている。入学前よりよっぽど成績もあがったし。

それまではどうしていたのか、思い出せないくらいだ。授業中に出版されている宿題は机の上の端末に送信されていて、出された宿題を間違えるということもない。

ノートに書いて今日勉強した内容を覚えながら、宿題を済ませる。

いつもならばそう時間のかかるものではないのだけど、今日は日中の集中不足のせいかな、授業で教えてもらったはずのところがわからず、何度も教科書を見直さなければならなかった。

四苦八苦しながら、なんとか宿題を終わらせる。

(ふう、やっと終わった)

本来宿題が終わったあととはしばらく自由時間で、好きな本を読んだりゲームをしたりできるのだけど、今日はそこまで時間の余裕もなく、ギリギリだった。

(ちよつと早いけど、もうこのまま寝ちゃおう……)

スプリングの強いベッドの上に寝転がり、仰向けになって呼吸を整える。

そして、ベッド脇にある『就寝』ボタンを押すと、部屋がすつと暗くなり、甘い香りがどこからともなく漂い出した。

それをゆつくり吸い込んでいると、急激に眠気が襲って来て、穏やかに眠りにつくことが出来たのだった。

水下司晃が眠りについて数分後。

彼女の部屋の扉が外から開かれ、ガスマスクを身につけた女性が部屋に入ってきた。

『拘束』の授業の際、晃に拘束具を取りつけるのを手伝った者と同じような筋肉質な身体をした女性で、ベッドで寝ている晃を軽々抱き上げて部屋の外に出て行く。

本来の晃は、寝ている際に身体に触れられれば起きる程度には普通の感覚をしている人間だったが、いまは抱き上げられても目を覚まさなかった。

無論、薬で睡眠状態にあるためである。

運ばれた先は、大浴場と呼ばれている場所だった。本来なら服を脱ぐ脱衣所に用意された簡易ベッドの上に晃を寝かせると、作業員は次々装飾品を外していく。

口枷、ブーツ、首輪、金属のブラに貞操帯。

貞操帯は内側に相当太い棒が突き出していて、晃の体内を埋め尽くしていた。

それを抜き取られる際には、さすがに晃の身体はびくんと震えたが、起きる気配はない。

ぽっかり空いた穴は、その太さの棒に慣らされていることがわかる。

そして、ついにラバースーツが脱がされていく。さなぎから脱皮する蝶のように、真っ白な晃の素肌がラバースーツから解き放たれた。

ラバースーツの内側には肌の状態を整える潤滑油が塗られており、彼女たちは入寮してから卒業までの間にシミ一つ無い完璧な身体を手に入れることができるのだ。

ラバースーツから手足の先までが解き放たれ、晃は全裸

となる。晃の身体は若々しい張り艶にあふれた肢体で、作業員の女性が思わず羨むように息を吐いたほどだった。

全裸になった晃を改めて抱え上げ、作業員の女性は風呂場へと向かう。中は一般的な大浴場に見られる大きな浴槽はひとつしかなく、代わりにいくつも細かく区切られた浴槽が準備されていた。

浴槽ひとつひとつに、ひとりずつ入浴させられるようになっていくのだ。

その浴槽に浸からせる前に、作業員の女は晃を抱えたまま、一般的な大浴場に見られるような数名が一度に浸かれる浴槽へと歩いて、その中に入っていく。

そうすることで抱えられたままの晃もそのお湯に浸かり、大まかな汚れを洗い落とせるようになっていくのだ。

これは晃が眠っている状態であるために、シャワーなどで頭から水をかけるのが危険だからだ。

その浴槽はお湯の循環が頻繁に行われるように作られており、汚れをざっと洗い流すための浴槽だった。

次に、並べられた一人用の浴槽に晃を浸からせる。浴槽の縁には首を固定するための窪みがあり、例えるなら美容院などで頭を洗ってもらう時の体勢に近い。

ちゃんと首が固定され、無理な力がかかっていないことを確認した作業員の女性は、柔らかなスポンジを手にとって、晃の身体を隅々まで磨いていく。

胸や手や足の指の隙間、普通は人に触らせないであろう

股間のヒダや肛門の皺に至るまで、作業員の女性は真剣に晃の身体を徹底的に磨く。

水がかからないよう、顔にタオルを被せた上で、頭もシャワーで洗われた。晃の背中の中程まで届く髪は丁寧に洗われ、しっかり水気を払われる。

さらに、その徹底的な清掃は、口の中にまで及んだ。作業員はまるで歯医者か何かで使うような器具を駆使し、口内の歯垢という歯垢を除去。無論、水分を吸い取る器具を併用し、晃が窒息しないように配慮されていた。

内も外もびかびかに洗われた晃の身体を再び抱え上げ、作業員の女性は次の行程に移行する。その頃には他の寮生も眠りについたのか、別の作業員に抱えられて晃と同じような流れで入浴させられていた。

裸の女子生徒たちを、ラバースーツを身に纏い、仮面を被った作業員たちが黙々と洗っている様は不気味ではあったが、この場にそれを気にする者はいない。

一足先に晃を抱えて脱衣所に戻ってきた作業員は、晃を先進的な機能が満載されたマッサージチェアに座らせる。作業員がタッチパネルを操作すると、その椅子が動き出して、座らされた晃の身体に至る所をもみほぐすように動き始めた。

そうして全体のもみほぐしは椅子に任せつつ、作業員は晃の手足の先、爪の手入れを始めた。一本一本丁寧に、伸びた分の爪をやすりで削っていく。磨き上げられた彼女た

ちの爪は、普段隠されているのがもったいないほどに綺麗で美しく仕上げられていた。

すべての爪の手入れが終わると、今度は髪。丁寧で水分を拭き取り、櫛で梳き、艶やかな黒髪がさらに映えるように整えられた。

それが終わる頃、ちょうど全身のもみほぐしも終わったのか、マッサージチェアから抱き上げられて移動。簡易ベッドの上に再び寝かされた晃は、さらに磨かれていく。

手足や背中に無駄毛が生えていないかを確認し、脇毛やあそこの毛も綺麗に剃ってしまう。さらに丁寧に全身にオイルが塗り込まれ、昔の貴婦人もかくやとばかりに全身がぴかぴかに磨き上げられた。

そんな彼女の身体を、再びラバースーツが覆っていく。無論、先ほど脱がされたものは別の、メンテナンスを施された綺麗なラバースーツだ。

オイルが潤滑油代わりになっているのか、本人の意識がない状態でも、丁寧にラバースーツが着せられた。首輪が締められ、脱げなくなる。

続いて全頭マスクが被せられ、晃の聴覚や声を封じてしまう。

足を開かされ、無防備にさらされた二つの穴に、潤滑油が垂らされる。作業員が指で丁寧にその場所に塗り込んだ後に、突起物のある金属の貞操帯が履かされた。尿道を貫くカテーテルがあるため、排泄にも問題はない。

最後に金属製のブラをつけるのだが、ここで作業員は一端動きを止めた。すべての器具は晃の身体に合わせて作られており、一部の隙もないように作られている。だが、それを差し引いても、装着するブラが窮屈に感じたのだ。

着ている本人たちも知らないが、ラバースーツの胸の部分は実は多少薄く、柔らかく出来ており、乳房の成長を阻害しないようになっている。

だが、金属のブラはその身体にフィットする構造上、サイズの合っていないものを身につけていると成長を阻害するとされていた。

晃の乳房が成長していると感じた作業員は金属のブラを装着せず、しばしその場を離れた。ほどなくして戻ってきた作業員の手には、新しい金属のブラがあった。

それを改めて晃の胸に装着する。こちらのサイズは多少余裕があり、しっかりと胸をホールドし、触れることを妨げつつも、成長する余地を残していた。

満足そうに頷いた作業員は、再び晃を抱え上げ、彼女の部屋へと運ぶ。

晃をベッドに寝かせると、まっすぐ身体を伸ばし、両手を身体に沿わせた「気をつけ」の姿勢を取らせる。

それから晃の首輪に触れると、晃の身体はまるで凍りついたかのように、ぴくりとも動かなくなつた。

ラバースーツが硬化し、全身が硬直したのである。それによって彼女は朝まで指先ひとつ動かせない状態で、

拘束されたままになるのだ。

作業員の彼女は最後にぶ厚いタオルのようなものを晃の目にアイマスク代わりにかけ、すべての作業を終えて部屋から出て行った。

完全に拘束され、管理されている彼女たち寮生の一日はこうして終わるのだ。

そしてまた——改変された世界の朝がくる。

ゝ寮生・水下司晃編ゝ おわり







あとがき

本作をご購入いただき
誠にありがとうございます

まずはこの作品を作るにあたってお世話に
なった方々に感謝を。

特に、素晴らしいラバースーツの質感と、
不思議な改変世界を見事に表現した
表紙絵を描いてくださったTiasti様には
無上の感謝を捧げさせてください。

「改変された世界の片隅で」の物語は
いったん幕を下ろしましたが、
「寮生・水下司晃編」とあるように、
当然の如く続編の構想があります。
すでにとりかかっているところですので、
期待してお待ちください！

それではまたどこかでお会いしましょう！

奥付

「改変された世界の片隅で
～寮生・水下司晃編～」

サークル名：ヤマタノサクラ

小説：夜空さくら
表紙絵：Tiasti

発行：2018年11月2日

問い合わせ、感想、ご意見はツイッターへ
(夜空さくら：@yozorasakura)

○無断転載・WEB上へのアップロードは禁止です。